



序章

これから読んでいただく物語は、ある小さな会社で起こった密告が原因で引き起こされた人間ドラマを忠実に描いたものである。世間でも注目されているサービス残業が発生していることを誰かが労働基準監督署に密告したことが始まりだった。

密告した犯人、それはなにを隠そう、この私だ。私が誰であるのかは物語を読んでいただく中でわかってもらうことにして、ここでは舞台となった会社のことを簡単に説明しておくことにしよう。

物語の舞台となったのは、東京池袋にある小島デザイン研究所という、販促物デザインの企画制作を行う会社だ。会社とはいっても、社長を含めて八人しかいない事務所みたいなところだ。

ここで、八人の紹介をしよう。

社長の名前は小島健一（四十五歳）、主に営業の仕事をしている。

その社長を支えているのが弟の小島浩二（四十二歳）だ。取締役管理部長の肩書きで、営業の仕事を手伝いながら、経理や総務の仕事を一手に引き受けている。

彼らの下に六人の社員がいる。そのうちの五人はデザイナーだ。パソコンでMacを駆使しながら、ひたすらデザイン作りに没頭している。彼らの名前と経歴を紹介しよう。

鶴見正樹（三十歳）と中山茂之（二十八歳）は、ともに転職組の社員だ。転職経験は、鶴見が三度、中山が一度ある。

残りの三人、井上将大（二十五歳）と江川大輔（二十四歳）、間島裕一（二十二歳）は、いずれも専門学校を卒業後、小島デザイン研究所に入社してきた生抜きの社員だ。

デザイナー以外に、事務担当の女性社員が一人いる。彼女の名前は加藤雅美（二十二歳）、高校を卒業後、一度の転職を経て小島デザイン研究所に入社してきた。

たったこれだけの小さな会社なのだが、ある日の一本の電話をきっかけに、ハチの巣をつついたような騒ぎに巻き込まれてしまった。

それでは、読者のみな様を、電話がかかってきた場面にご案内しよう。

第1章 密告

1.

「社長、お電話です」事務担当の加藤雅美の声に、社長の小島健一は顔を上げた。

「誰から？」

「ロウドウカントクショとか言っていました」

「ロウドウカントクショ？」健一が怪訝な表情を浮かべる。

「労働基準監督署のことじゃないですか？」隣のデスクでパソコンを叩いていた取締役管理部長の小島浩二が顔を向けた。健一の弟であった。

「労働基準監督署が、なんの用なのだろう？」健一は浩二に問いかけた。労働基準監督署という役所があることは知っていた。社員の雇用に関する取締りをするところだということも知っている。健一は、労働基準監督署に対して、税務署と同様に敵性のイメージを抱いていた。

「なんかの問い合わせじゃないんですか？」浩二が、『とりあえず電話に出てみたら？』とでも言いたげな表情で言葉を返してくる。細面にシャープな銀縁眼鏡の浩二は、見た目はクールに見えるが、実際も冷静な男だった。

健一は、今の会社を立ち上げたときに、会社員であった浩二に自分の右腕になってくれるように頼み込んだ。健一は、どちらかというと激情家タイプだった。営業は得意だが事務系の仕事は苦手である。自分にない部分をカバーしてくれる人材として、弟の浩二は適任だった。

「浩二、代わりに出てよ」いつものように下の名前で呼んだ健一が、浩二に向かって電話に出るよう促した。

「社長あてにかかってきたのですから、とりあえず出てみたらいいんじゃないですか？」浩二が、冷静な口調で言葉を返す。

「あのお、電話保留したままなんですけど……」電話を取り次いだ加藤が困惑した表情を浮かべた。浩二の視線もデスクのパソコンに戻っている。

健一は、恐る恐る受話器を上げた。

「お待たせしました。社長の小島ですが」

「私、池袋労働基準監督署の安藤と申します」受話器の向こうから低く落ち着いた男の声が伝わってきた。

「実は、本日お電話いたしましたのは、私どものほうに御社の時間外労働賃金の支払いが適切に行われていないという告発がありましたので、実態確認が必要と判断し、ご連絡しました」

「時間外労働賃金が適切でない？」

「はい」

「どういう意味でしょうか？」

「残業代が適切に払われていないということです。つまり、サービス残業が行われているのではないかということです」

「サービス残業ですって？　うちは、ちゃんと賃金は支払っていますが」健一は気色ばんだ。話が唐突過ぎると感じたからだ。

「もちろんそうされているとは思いますが、告発があった以上は無視するわけにもいきませんので、ご連絡差し上げました。こちらのほうから御社に伺いますので、実態確認をさせていただきませんか？」言い方は柔らかであったが、電話の声には妥協は感じられなかった。

健一も、労働基準監督署の調査を受け入れざるを得ないと感じていた。

調査は、電話のあった日の翌日に行われることになった。社内の会議室に、健一と浩二、労働基準監督署の安藤が顔を揃える。

名刺交換による挨拶の後、調査が開始された。

「それではさっそくですが、賃金台帳と直近半年分のタイムカードを拝見できますか？」安藤が、健一と浩二の顔を交互に見ながら要求事項を告げた。

「うちはタイムカードじゃないんですが……」浩二が、社員が出勤簿に出勤と退社の時刻を記入して押印する形式であることを説明する。

出勤簿と賃金台帳の提出を受けた安藤が、双方の資料を交互に見比べながら、鞆の中から取り出した電卓をたたき始めた。静寂な空間に、電卓をたたく音だけが響き渡る。

しばしの後、安藤が顔を上げた。明らかな証拠をつかんだとも言いたげな自信満々な表情を浮かべている。

「御社の始業時刻は、午前九時でよろしかったですよね？」

「はい」健一が頷いた。

「となると、終業時刻は午後六時ですか？」

「一応、そのつもりではいるのですが」

「週休二日制ですよ？」

「ええ」

「それでは、終業時刻は午後六時で間違いありませんね。週の法定労働時間が四十時間なのですから」安藤が、終業時刻が午後六時であると決めつけた。週の法定労働時間との関係で、終業時刻が午後六時よりも遅い時刻だと問題だという言葉も口にする。

健一の中にも、感覚的に社員の勤務時間が午前九時から午後六時であるという認識はあったのだが、それはあくまでも原則論であり、実際の勤務時間はその日の仕事量によって決まるものだという考えを持っていた。事務的な細かい管理は浩二に任せていたが、自分自身が今までそのような働き方をしてきたということもあり、社員の所定の勤務時間ということ意識したことはなかった。

「となると、やはりサービス残業が発生していますね」安藤が、勝ち誇ったような表情で、二人の目の前に出勤簿と賃金台帳を並べて残業代が支払われていない事例を一つ一つ指し示した。安藤の説明によると、退社時刻が午後六時を越えている部分に対して、その都度超えた時間に応じた残業代を支払わなければならないということであった。

健一は、忙しかった月などに、慰労的な意味合いで通常の給料とは別に一時金を社員に支給していた。その一時金は、賃金台帳にも記録されている。安藤の言い分では、その一時金を残業代と見なした場合であっても、実際に支払わなければならない残業代には程遠いということであ

った。今回は、夜遅くまで居残ることの多いデザイナーの残業代がやり玉に挙げられていた。

「しかし、彼らは自分のペースで作業をしているわけですし、本人たちも残業とかという意識はないと思うのですが……」健一は必死に弁解した。実際に、デザイナーたちは自分たちのペースで作業を進めていた。健一も、いちいち細かい指示は与えていない。自分たちのペースで作業をしているのだから、毎月支払う給料以外に賃金を支払う必要などないのではないかというのが健一の主張であった。

健一は、その考えを口にした。それに対して、安藤が反論する。

「おっしゃることもわからんではないのですが、実労働時間に応じた賃金を支払うのが原則なのです。毎月の給料の中に、一定の残業代が含まれているわけでもないですよね？」

「まあ……」言葉を濁しながら、健一は浩二に視線を向けた。

「そうです」浩二も頷く。

「どうしても社長さんの考えでいきたいというのであれば、会社とデザイナーさんとの間で協定を結んでください」協定を結べば、実際の勤務時間に関係なく一日の労働時間を一定時間に見なすことができるということであった。その場合でも、深夜や休日に勤務した場合の別手当は必要だということだ。

一通り不適切な部分を指摘した安藤が、おもむろに書類を書き始めた。是正勧告書であった。

是正勧告書には、半年分遡って残業代を計算し直した上で不足分を支払えという内容とともに、今後このようなことを発生させないための仕組みを作れという内容が命令という形で記されていた。協定を結ぶ場合は、デザイナーと協議した上で双方が合意する内容を取り決め、労働基準監督署に届け出るという内容も記されている。

命令には期限が切られ、期限内に報告することを求められた。報告がない場合は、なんらかの処罰が下される可能性が高いという。

是正勧告の内容を確認した健一は、今回の発端となった密告源を確認することにした。密告者が誰なのかを安藤に問い質す。

それに対して安藤の口から語られたのは、サービス残業の実態を指し示す証拠の資料が同封された告発文が労働基準監督署に郵送されてきたということだった。その内容から、労働基準監督署は内部告発であると判断し、調査に乗り出したということだ。

告発文の現物を見せてほしいと口にした健一だったが、安藤から断られた。

2.

調査が終了し、健一は浩二とともに安藤をエレベーターまで見送った。安藤を乗せたエレベーターが一階に向かって降下する。

健一の顔は紅潮していた。こぶしを握り締め、口を一文字にししながら眼を大きく見開く。

「みんなに一言言うぞ！」そう浩二に声をかけた健一は、勢いよくオフィスのドアを開けた。オフィスの一番奥にある自分のデスクまで戻り、「みんな、ちょっといいか！」と声をかける。

その声に、六人の社員たちが顔を向けた。一様に、何事かというような表情を浮かべている。浩二も席に着いた。社員たちが話を聞く体制に入ったことを確認した健一が口を開く。

「先ほど、労働基準監督署からの調査が入った。要件は、当社にサービス残業が発生していないかどうかの確認だ」

「……」

「なんで、いきなりこんな調査が入ったと思う？」健一は社員たちの顔を見回した。内部告発ということは、社内の誰かが告発したということだ。健一が、一人一人に視線を当てる。

「内部告発があったからだ。現物は見せてもらえなかったが、労働基準監督署に告発文が送られてきたということは確認した」

「告発文ですか？」社員の一人が聞き返した。社員たちの間にざわめきが広がる。

「そうだ、告発文だよ。どんな資料なのかはわからないが、証拠資料も同封されていたようだ」

再び、社員たちの間にざわめきが広がった。互いに顔を見合わせる。オフィスの中に、誰が告発者なのかを探りあうような空気が生まれた。

そんな空気を尻目に、健一が語気を強める。

「細かく労働時間を計算して残業代もきっちり計算するのが原則だということはオレもわかっている。でも、うちのような小さな会社は、四角四面なことを言いあうんじゃないで、みんなで支えあっていくべきなんじゃないのか？ だからオレも、細かい口出しはせずに、みんなに自分たちのペースで作業をしてもらっていたんだ。……みんなと気持ちが一つになっていると思っていたのに残念だよ」

「……」

「せめて、不満があるのだったら、告発文なんか送らないで直接相談してもらいたかった。みんなのことを信頼していたのに裏切られたような気持ちだよ」

健一が口をつぐんだ。社員たちも言葉を発さない。浩二も、難しそうな顔をしたまま押し黙っている。

「以上だ。仕事に戻ってくれ」健一が、一方的に報告を終えた。

社員への報告を終えた健一は、浩二を外に連れ出した。会社の近くにある喫茶店に入る。二人分のコーヒーを注文した健一は、テーブルに向きあう浩二に向かって問いかけた。

「なあ、どう思う？」

「なにがですか？」浩二が質問の意図を問い返す。

「誰が犯人なのかということだよ」

「それは……、ちょっとわかりませんね」

「あの六人の中の誰かだろう？」

「そうかとは思いますが」

「そうかとは思って、そうじゃなきゃ誰がいるんだよ。まさかキミか？」

「違いますよ！」心外だというような表情で浩二が手を振った。

「じゃあ、六人の中の誰かじゃないか！ 内部告発なんだから」

「そうですね……」

二人の目の前に、注文したコーヒーが運ばれてきた。会話が途切れ、二人がコーヒーをすすめる。二人の間を重苦しい空気が支配する。

しばしの後、コーヒーカップをテーブルに置いた健一が口を開いた。

「キミにやってもらいたいことがあるんだが」

「なんですか？」

「うん……。内部告発の犯人を見つけてくれないか？」

「えっ？ そんなことをして意味があるのですか？ まさか、密告者を見つけてクビにするつもりじゃないでしょうね？」

「そこまでは考えていないよ。でも、みんなも動揺しているだろうし、この際密告者を見つけ出して、直接話しあってスッキリさせたほうがいいと思うんだ。そのほうが、わだかまりが残らずに済むだろう？」

「そうかもしれませんが……。でも、密告者を見つけろって言っても、どうやればいいんですか？ 本人から名乗り出てくるとも思えませんし」

「本人から名乗り出てこなくても、調べれば、ある程度はわかるだろう？ 一人一人と面談して話せば、ぼろを出すかもしれないし。オレが面談したら、みんな間違いなく口をつぐむだろう？ まだキミのほうが話を引き出しやすいと思うから。それに、キミのほうが普段社内にいる時間も長いから、オレよりは社員たちのことを見ていると思うし」

「そりゃ、そうですけど……」浩二が、今一つ気乗りがしないといった表情を浮かべた。

「じゃあ逆に聞くけど、キミは、このままうやむやにしたほうがいいと思っているのか？ みんながわだかまりを抱えたまま仕事を続けていくようになってもいいのか？」

「そうは思っていないけど」

「それじゃ協力してくれよ」

「わかりました」浩二が頷いた。

「やり方はキミに任せるから……」健一は、やり方は任せるので、はっきりとしたことがわかった時点で報告してくれるよう口にした。

思案顔を浮かべた浩二は、カップの残りを一気に飲み干した。

3.

健一と浩二が席を外した後のオフィス内には動揺が広がっていた。普段から寡黙な井上こそは黙々とデスクの上のパソコンと向きあっていたものの、鶴見、中山、江川、間島の四人は、デザイン制作の手を休め、手の指を動かしたり目をキョロキョロさせたりなど落ち着きのない行動を取り始めた。事務担当の加藤も、男たちの顔色を覗っている。

「社長、マジに怒ってましたね」江川が、誰に向けるともなく呟いた。

「あの二人、外に出ていっちゃったけど、どうしたんだろう？」中山が、他の五人の顔を見回しながら、社長と管理部長が外に出ていったことへの疑問を口にする。

「今後の対策を打ち合わせしているんじゃないの？ オレたちに聞かれたらまずいこともあるんだろうしね」最年長の鶴見が訳知り顔で言葉を口にした。三十歳と社員の中で最年長であり唯

一の家庭持ちでもある鶴見は、他の五人とは異なり落ち着いた雰囲気をも身にとっていた。今も動揺する態度を表に出す社員たちの中で、彼だけがクールな表情を浮かべていた。

鶴見の言葉に、何人かが頷く。

そんな中、間島が、誰にともなく「労働基準監督署って、なんですか？」と問いかけた。間島は、井上や江川と同じで、専門学校を卒業してすぐに小島デザイン研究所に入社してきた生抜き社員だった。年齢は二十二歳と五人のデザイナーの中では一番若い。間島の中でも他の四人は先輩であるという意識があり、なにかにつけて自分のほうから教えを乞うていた。

間島の質問に対して、鶴見が「会社の労働分野に関する法律違反を取り締まるところだよ。前にいた会社でも、労働基準監督署の人間が会社に入り込んできたことがあったよ」と口にする。

さらに江川が、「会社に強制的に書類を出させたり、違反している会社を処分したりする権限もあるみたいだぜ。違反した会社の社長が送検されることもあるみたいだしね」と言葉を加えた。

「へえ、よく知っているね」鶴見と同じ転職組の中山が感心したような表情を向ける。

中山は、前職でもデザイナーだった。おもちゃのデザインが担当であり、今のようにオフィスの中でパソコンと向きあい作業に没頭する仕事のスタイルであった。そのせいか、勤務時間が不規則になったり夜遅くなったりすることに違和感を覚えることはない。同じ転職組であっても、鶴見とは勤務時間に対する考え方が異なっていた。鶴見も、前職こそは食品パッケージのデザイナーの仕事に従事していたが、デザイナー以外の仕事も経験しており、勤務時間が不規則であることに対する違和感を口にすることがあった。

中山の問いかけに、江川が「兄が弁護士をしている関係で、そのような話を耳にしたことがあった」という返事をする。

それに対して、鶴見が「じゃあ、社長と管理部長にお兄さんを紹介してみたら？ うまく対処してくれるかもよ」と混ぜ返した。その言葉で、その場の空気が和む。事務担当の加藤も交えて、会社が江川の兄に弁護を依頼した後の展開や費用のことなどについての空想話が広げられた。

そんな中、話割りに入るように、間島が鶴見と中山に向かって「鶴見さんたちは、前の会社にいたとき、残業代ってどうなっていたんですか？」と問いかけた。

鶴見と中山が、互いに顔を見合わせる。

しばしの時間互いにけん制しあっていた二人だったが、やがて鶴見が口を開いた。

「オレのところは、最初から一定時間分の残業代がついていたな。たしか裁量制とか言っていたような気がするけど」

「ボクのところは、普通に残業代が支払われていたよ」中山も返事をした。

「普通って、残業時間をきっちり計算していたんですか？」間島が驚いたような顔で問い返す。

「残業っていっても、そんなにたいしてなかったよ。今の会社ほど仕事は多くなかったし、それにリーダーが毎朝その日の作業計画を指示して、残業するのもリーダーの許可が必要だったから」

二人の説明に、江川と間島が『そのような会社もあるのか』というような表情を浮かべた。話

の輪に加わずに作業をしていた井上の視線も二人に向けられていた。

しばらくの間雑談を交わしていた井上以外の五人であったが、健一と浩二が戻ってきたのを機に、雑談を止め、仕事の手を動かし始めた。オフィスの中に静寂が戻る。健一と浩二も無言で席に着いた。

社員たちも、仕事の手は動かしているものの、神経は二人のほうに向いていた。自分たちに対して、なにか発信があるのではないかと思ったからだ。

社員たちの耳に、普段は気にしたことのない他人がキーボードをたたく音やマウスをクリックする音が、はっきりとした音で飛び込んでくる。

しかし、二人の口からはなにも語られなかった。何事もなかったかのように黙々と仕事をしている。

やがて、社員たちの神経も、目の前のパソコンに向けられた。

間島も、目の前の作業に集中していた。数日前から取り掛かっている食品スーパー用の販促ボードのデザインと向きあう。

そのとき、パソコンがメールを着信した。送信者は江川であった。

メールを開いた間島の目に、『今晚一緒に食事をしないか?』という文字が飛び込んできた。間島が、江川に視線を向ける。江川は、何事もなかったかのようにパソコンに向かって作業をしていた。

間島は、食事の誘いを了承するメールを返信した。

4.

「鶴見さんって、怪しくね？」皿に取り分けた鶏の唐揚げを頬張っていた間島に向かって江川が話しかけてきた。

時間を調整しあい同時刻に仕事を終えた二人は、会社がある池袋から電車で渋谷まで移動し、駅近くにある居酒屋に入った。渋谷まで移動したのは、江川の希望だった。

二人が、晩御飯替わりの料理と生ビールを注文する。居酒屋は、若者たちでにぎわっていた。

「怪しいって、今回の件ですか？」今回の件とは、労働基準監督署に対する密告のことである。

「もちろん」江川が、料理を摘まみながら言葉を返す。

「どうなんでしょうね」

「だってさあ、オレや間島や井上さんは、みんなこの仕事が好きで入ってきたわけじゃん。デザイン系の専門学校が就職難だった時代に採用してもらって、社長に感謝している気持ちも同じだと思うし。間島だって、残業時間のことなんか気にしたことないだろう？」

「そうですね」

「だろう？ だから、オレや間島や井上さんはチクる理由がないと思うんだよ。雅美ちゃんだってチクる理由はないと思うし。彼女は、基本的に残業していないからね。でも、転職してきた

鶴見さんと中山さんは、オレたちとは、感覚というか価値観が違うと思うんだよね。とくに、鶴見さんは家庭があるから、残業代がきちんと計算されていないことに不満を持っているんじゃないのかな。これから、どんどんお金が必要になるだろうし……」箸を置いた江川が、にわか推理を展開した。

一気にしゃべり終えた江川が生ビールを口にする。つられたように、間島も生ビールに口をつけた。

勢いよくジョッキを置いた江川が「そう思わねえ？」と自らの推理に対する同意を求める。

「どうなんでしょうね」間島は、再び曖昧な言葉を返した。慎重な性格の間島は、他人との会話の中で、自分の意見を口にする前に『どうなんでしょうね』という言葉の口にするのが癖になっていた。

「キミは、どう思っているんだよ？」江川が、間島の見解を問い詰める。

「そうですね……。たしかに鶴見さんって、なにを考えているのかわからないところがありますからね」

「やっぱり、キミもそう思うか。オレも、そう思っていたんだよ。あの人、三回転職したって言っていたじゃん。そのせいかもしれないけど、なんか妙に世間ずれしているなあって感じていたんだよね」江川が、過去に鶴見が社内で発した発言の中で世間ずれしていると感じた事例をいくつか口にした。

「そう、そう、そう……」間島が、江川の指摘に合いの手をはさむ。

二人の間で、鶴見に関する過去の発言や出来事を思い起こし揶揄しあう会話が繰り広げられた。揶揄されるターゲットが、鶴見から管理部長、社長へと広がっていく。

「でも、誰だか知らないけど嫌なことをしてくれたよな。今回の件で、社長はオレたち全員を疑っているわけだろう？」ひとしきり他人を揶揄する会話を楽しんだ江川が、話題を密告の話に戻した。

「ほんとうに、全員が疑われているんですかね？」ビールの酔いで幾分顔の赤くなった間島が語気を強める。周囲の喧騒で互いの声が聞き取りづらくなっていたからでもあった。

「だって、内部告発ってことははっきりとしているわけだろう？ だったら、オレたちの中の誰かがやったってことになるじゃないか！ 管理部長は社長と一心同体みたいなものだからやるわけではないと思うし、雅美ちゃんもさっき言ったように理由がないと思うし。だから、必然的に残るのはオレたち五人ってことになるわけだよ。なかでも、鶴見さんが一番怪しいってわけだ」

「中山さんだって怪しくないですか？」

「なんで？」

「今日、社長と管理部長が出ていった後にみんなで話をしたときに、ボクが、鶴見さんと中山さんに対して前の会社での残業代の扱いがどうだったのかを聞いたでしょ。そのとき、中山さんは、前の会社では普通に支払われていたって言っていたじゃないですか」

「たしかに、そう言っていたな。たいして残業はなかったとも言っていたけど……」江川が、記憶をまさぐるように視線を上に向けた。

「だから、デザイナーでも残業代は普通に支払われるものだっていう頭があって、チクッた可

能性もありますよ」

「そう言われてみると、そうかもしれないな……」江川が、頷きながら言葉を返した。

店に入ったときは密告者に関する推理に熱弁を振るっていた江川であったが、アルコールが回るにつれて、自分も疑われる立場にいることが納得できないという思いを前面に打ち出していた。

間島も、アルコールが回るのに比例して口数が多くなっていた。

「密告なんて、卑怯なやり方だと思いませんか？」間島が、からみつくように口にする。

「絶対に思う！ 言いたいことがあるんだったら、面と向かって言えばいいんだよ！」江川も声を張り上げる。

「男のやることじゃないでしょ！」

「じゃあ、チクツたのは女か？ 雅美ちゃん？ でも、なんか違わなくない？」

「彼女は違いますよ」

「他に女なんていないじゃん」

「やっぱり男の仕業ですかね……」

店内の喧騒の中で、二人による堂々巡りの会話が続けられていた。

5.

江川と間島が居酒屋で盛り上がっていたころ、鶴見と中山も会社の近くの居酒屋で食事をともにしていた。偶然同時刻にその日の作業を終えた二人が、どちらからともなく誘いあわせた。

デザイナーという仕事柄、一日の作業量がまちまちであるため、普通のサラリーマンのように同僚同士が誘いあわせて仕事帰りに一杯やるなどということはめったにない。三歳になる娘を持つ鶴見も、付きあい始めて二年になる彼女とラブラブな関係にある中山も、いつもは仕事を終えたあとは、寄り道をせずに戻りすぐ帰宅していた。

今日は普段よりも多少遅めの時間であったのだが、二人とも飲んで帰りたい気分には駆られていた。

ひとしきり料理を口にして空腹を収めた二人は、密告の話題を口にした。

「誰なんだろうね？」中山に視線を向けた鶴見が、密告者が誰なのかという言葉で口にした。その視線は、目の前の中山のことさえも疑っているかのような雰囲気を出していた。

「誰なんでしょうね？」中山が、言葉を返す。

「オレじゃないからね！」鶴見が、声を強めながら否定した。

「ボクも違いますよ」中山も、否定の言葉を口にする。

「じゃあ、あとの三人か……」鶴見が、ボソッと呟いた。

「加藤さんもいますけどね」中山が、加藤にも可能性があるということを示唆する。

「そうだな。あの娘(こ)がチクツた可能性も否定はできないよな」鶴見も頷いた。

二人の会話が途切れた。鶴見がジョッキを手に取り、中身のビールを口に運ぶ。中山も、目の前の料理を口に運んだ。

それぞれが思案気な表情を浮かべる。誰が密告者なのかを頭の中で推理しているかのような表

情だった。

やがて、鶴見が口を開いた。

「そういえば、社長が、告発文に証拠資料が添えられていたって言っていたよな？」

「言っていましたね」

「たぶん、証拠資料の中身は、出勤簿のコピーとか給与明細とかだと思う」

「そうですね。サービス残業があったことを証明するわけだから」

「それって、ヒントになるんじゃないのかな？」

「なんのヒントですか？」

「チクった奴を特定する上でのヒントだよ。出勤簿のコピーなんて、みんながいるところで堂々とやるわけにはいかないだろう？ やるんだったら、みんなが帰った後とかじゃなきゃダメなわけだよ。オレたちの中で、一番遅くまで残ることが多い奴って誰かな？」

「井上じゃないですか？ ボクが残業して帰るときにも彼は必ずといってよいほど残っているし、江川や間島たちも、たいがい井上が一番遅くまで残っているって言っていましたもん」

「だろう。あいつが一番遅くまで残っていることが多いよな」

「ええ」

「井上っぽくないか？ あいつなら、証拠資料をコピーするチャンスがたくさんあったわけだし。それに、あいつ、なにを考えているかわからないところもあるじゃん」

「ありますね」中山も頷いた。

寡黙な井上は、社員同士が雑談をしても、その輪には加わずに一人だけの世界を築いていた。誰かが話しかければ答えるが、自分のほうから話しかけてくることはめったにない。今まではそういう奴なのだという思いで接していたが、このような事態が発生してみると、自分のことを表に出さない井上が怪しく思えてくる。二人の脳裏に、そのような思いがよぎっていた。

「彼がチクったとして、理由はなんなのですかね？」

「さあ……、会社に対する不満が溜まっていたんじゃないの？ 内向的な性格だから、発散する場がなくて、あんな形でやっちゃったんじゃないのか？」

「そんな感じでしょうかね」

二人の間で、井上が密告者だと決めつけた会話が繰り広げられた。

鶴見との会話を続ける中で、中山の脳裏に別の人物の顔が浮かんできた。証拠資料を手に入れやすい状況にあるといえば、もう一人該当者がいるではないか。その人物なら、みんなの前でコピーをしても不自然に思われることはない。中山は、思いついた考えを口にした。

「井上以外に、もう一人考えられる人物がいると思うんですけど」

「だれ？」鶴見が眉間にしわを寄せる。

「管理部長ですよ」中山が、頭の中に浮かんだ人物の名前を口にした。

「か、管理部長？」鶴見の声が裏返った。鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。

「それは、いくらなんでもないだろう。だって、社長の弟だよ。いってみれば、社長の右腕じゃん。もし責任を問われることになれば、自分自身にも影響するわけだし」

「そうなんですけどね。でも、ボクたちの勤怠資料は管理部長が全部管理しているんだし、ど

ういう資料をつけて密告すれば労働基準監督署が動くかっていうのも、管理部長ならわかると思ったんですよ。やっぱ、管理部長がチクッたっていうのはあり得ないですかね？」中山が、自分自身の考えを打ち消す言葉を口にした。

「いやっ、そうとも言えないかもな……」鶴見が身を乗り出してくる。

「あの人、根が真面目なタイプだから、今の状況は良くないと思っていたのかもしれないな。でも、社長に進言すると喧嘩になるから、苦渋の選択で密告したのかもしれないよ。自分の身を切っても会社を正しい方向に進めようとする判断だったのかもしれないね」

「そこまでしますかね？」中山が『いくらなんでもあり得ないのではないか？』と言いたげな表情を浮かべた。自分から言い出したことだったが、よくよく考えてみれば非現実的な話であった。管理部長は、自分の目から見ても社長と一心同体であるように映る。疑問に思うことがあれば社長と話しあえば済むことだ。それに、今回のことで社会的な責任を追及されることになれば、管理責任者である自分自身にも非が及ぶ。社長と話しあわずに密告するなど、管理部長にとってなんのメリットもないことだ。

鶴見も同じような考えに至ったのであろう。管理部長を密告者とする会話はそれ以上は続かなかった。

「これからどうなるんでしょうかね？」中山が、今回のことに対する会社の対応や自分たちへの影響を問いかけた。

「無視するわけにはいかないだろうから、残業代の仕組みとかを考えるんだろうね」鶴見が、給料が増えることを意識させる言葉を口にする。

「鶴見さんも、残業代をきっちり払ってもらいたいですか？」

「まあ、こういう仕事だからきっちりってわけにはいかないんだろうけど、正直、給料が増えるのは嬉しいよ。嫁さんとの間では二人目の子どものことも考えているし……。中山だってそうだろう？ 付きあっている彼女との結婚を意識するんだったら、収入のことは大事だろうし」

「そうなんですよねぇ……」中山の脳裏に結婚の二文字が浮かび上がってきた。彼女も、暗に自分からのプロポーズを待っているような言葉を口にするようになっていた。自分自身も、そのことをひしひしと感じている。結婚したとしても、しばらくの間は共働きをするつもりでいるが、いずれ子どもができれば自分一人の収入で生活をしなくてはならなくなる。そもそも、結婚をするのであれば結婚費用も貯めなければならない。

中山の胸の中に、これを機に給料が増えることを期待する気持ちが広がった。

6.

次の日の朝、間島は気だるい身体を奮い立たせるようにベッドから抜け出した。昨晚の酒が抜け切れていないのか、頭の中が重く、胃の中が熱い。息や汗からもアルコールの匂いがしみ出してくる。

「やっちゃったな……」虚ろな表情で呟いた間島は、冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、中身の水を一気に飲み干した。昨晚、江川と飲んだときのことを思い返す。

二人で飲むのが久しぶりということもあり、はしご酒になってしまった。飲み終えたのは終電

ギリギリの時刻であった。

間島にとって、同じ生抜きのデザイナーであり歳も一番近い江川は、もっともしゃべりやすい存在であった。江川に対しては、プライベートの話も口にしていた。江川も、自分のプライベートに関する話を間島に語っていた。

密告者探しから始まった昨晚の二人の話題も、互いが抱えている案件の話題や芸能、スポーツ関係の話題へと広がり、二軒目の店では互いの人生目標的な話題で盛り上がった。偶然、間島が腕時計の時刻を目にしなかったら、間違いなくタクシーで帰宅するところであった。渋谷から間島の住むマンションまでタクシーを使えば、深夜料金も含めて五千円ほどの出費となる。

「危なかったよな……」余計な出費を抑えられたことへの満足感を甦らせた間島は、飲み終えたペットボトルをゴミ箱に放り入れ、洗顔と歯磨きをするべく洗面台へと向かった。

出社した間島がパソコンのメールボックスを覗いたとき、中に加藤雅美からのメールが届いていた。メールの内容は、『相談したいことがあるから、今日仕事が終わった後に時間を作ってもらえないか』という内容であった。

「なに？ 相談って」胸の中で呟いた間島は、顔を振り向け、加藤に視線を向けた。加藤の席は、間島の席の斜め後ろの位置にあった。

加藤は電話対応中だった。振り向いた間島の視線に気づく様子もない。

今日の作業予定を頭の中で確認した間島は、時間を指定した上で、池袋駅の近くにあるカフェで待っていてくれるよう返信メールを送った。

「お先に失礼します」予定していた作業を終わらせ居残る先輩社員たちに一声かけた間島は、加藤と待ち合わせをしているカフェに急いだ。会社からカフェまでは歩いて十二、三分ほどの距離であったが、今の時刻が約束した時間の五分前であった。

駆け足で急ぎ、約束の時間よりも五分ほど遅れた間島がカフェの入り口を開けたとき、奥の席でスマホをいじる加藤の姿があった。

「ごめん、遅くなって」声を出した間島が、奥の席へと向かう。

「お疲れさま」スマホをいじるのを止めた加藤が顔を向けた。加藤の前には、口の付けられていないアイスティのグラスが置かれていた。

注文を取りに来た店員に加藤と同じアイスティを注文した間島は、加藤と向きあった。

「二人でお茶するのって、初めてだよな？」加藤が、照れたような表情を浮かべる。

「そうだよな。そもそも、雅美ちゃんと帰りが同じ時間になることなんてないしね」間島は、二人でお茶をするタイミングが元からなかったことを口にした。

めったに残業することのない加藤は、いつも午後六時の終業時刻とともに退社していた。一方、デザイナーである間島は、午後六時で仕事を終えられることなどめったにない。残業にならない日でも、午後六時ちょうどに仕事を終えるなどということはない。

間島にとって、同じ年である加藤のことは気になる存在だったが、会社帰りに二人で食事に行ったりすることは今までいっさいなかった。

「どこで時間を潰していたの？」間島は、約束した時間までの間、加藤がどのように時間を潰していたのかを問いかけた。今日の作業予定を頭の中に思い浮かべ、午後六時に終わらせることが難しいと判断した間島は、余裕をもって午後七時を指定した。余裕をもって時間を指定したはずだったが、それでも約束の時間を過ぎてしまったのだ。

「デパートの中をうろうろしていたら、あっという間に時間が経っちゃった……」加藤が、デパートの中のウィンドウショッピングで時間を潰していたことを口にする。

「おなか空いている？」間島は、加藤に問いかけた。普段はもっと遅い時間に晩御飯を口にしている間島はさほど空腹を感じていなかったが、いつも午後六時に仕事を終えている加藤は空腹を覚えているのではないかと感じたからであった。

「けっこう空いている」加藤が返事をする。

「なんか食べようか？」

「そうしよう」

二人は、食事の注文を追加した。

食事をともにしながら、二人は何気ない会話を繰り広げた。同じ年であり、流行やライフスタイルなどに関する価値観も合うため、話題には事欠かない。

会話が尽きることのないまま、二人は食事を終えた。最初に注文したアイスティのグラスも空になっている。

「ドリンク注文する？」間島は、加藤に問いかけた。

今日は、そもそも加藤が相談したいことがあるということで二人は会うことになったのだが、いまだに加藤の口から相談したい内容は語られていなかった。

加藤の返事を確認した間島は、ドリンクのお代わりを注文した。新しいアイスティのグラスが二人の前に置かれる。

「今日、なんかオレに相談したいことがあったんじゃないっけ？」間島は、加藤に視線を当てた。

「うん」加藤がうつむく。

「どんな話？」

「あのね……」話を切り出しづらそうな表情を浮かべた加藤が躊躇した。

しばしの時間、二人の間を沈黙が支配する。

やがて、意を決したような表情で加藤が口を開いた。

「例の密告の件なんだけどね……」

「それがどうかしたの？」

「あの、怒らないで聞いてほしいんだけど、あれやったの、ひょっとして間島くん？」

「えっ？」間島は、大きく目を見開いた。加藤は、自分が密告者なのではないかと考えているようだ。なにを根拠に、そのように考えたのだろうか。

「なんでオレが犯人だと思うわけ？」間島は、加藤がそのように考えた理由を問い返した。

「間島くん、会社のパソコンで、労働Q & Aみたいなページを検索していたでしょ。何度か見

たことがあったから」

加藤の指摘に、間島も思い当たる節はあった。少し前に参加した友人との飲み会で、会社の労務管理に関する話題で盛り上がったことがあった。そのときに、友人の一人が労務管理についてわかりやすく解説されたサイトがあることを口にし、そのときの記憶が残っていた間島が、後日会社のパソコンでそのサイトを検索した。労務管理の専門家が開設したサイトであり、現在のトピックスやQ & Aなどがわかりやすく書かれていたため、間島も興味本位で何度かそのサイトにアクセスしていた。

加藤の席は間島の斜め後ろにあり、間島のパソコンの画面が視野に入る位置にある。おそらく、席にいた加藤に、サイトにアクセスしているところを見られたのだろう。

間島は、友人から聞かされてサイトにアクセスしたのだということを説明した。

「そうだったんだ……」加藤が頷く。

「相談したいことって、オレが密告者なのかどうなのかを確認したかったってことだったの？」間島は、相談したいことの趣旨を問い質した。

「もし間島くんがね、会社のやり方に不満を持っているんだったら協力しようかなと思っていたの。私、事務の仕事をしているから、なにか必要な資料があるんだったら、揃えるのに協力できるんじゃないのかなと思ってね……」加藤の相談の趣旨は、今回の密告に関することを白黒つけるにあたって労務管理に関するなにがしかの社内資料が必要になる場合、自分にも協力する気持ちはあることを伝えたいということであった。それも、間島が密告者であるという前提に立った話である。

「だから、オレじゃないって！」間島が、再び自分が密告者でないことを強調する。

「わかったわ。ごめんね、変なことを言って」

「別に、気にしていないよ。それよりも、雅美ちゃん自身が会社のやり方に対して不満に思っているわけ？」

「そういうわけじゃないけど。もともと、私は残業することなんてほとんどないから」

「じゃあ、なんで協力するみたいな話になるわけよ？」

「だからね、その……、間島くんが不満を持っているんだったら協力してあげようかなと思っただけ」

「オレじゃねーし。それに、雅美ちゃん自身が不満に思っているんじゃないのなら、協力しても意味ないじゃん？」

「そうよね、意味ないよね」加藤がはにかんだ。

相談の内容を確認し終えた間島が目の前のドリンクを口にする。

そのとき、ある考えが間島の脳裏をよぎった。

加藤は、間島がサイトにアクセスしたところを何度か目にしたということだが、間島自身、飲み会に参加した後の数日間、何度かアクセスしただけのことだった。それなのに、加藤がそのような場面を何度か目撃したということは、加藤の視線が自分に向けられていることが多いからなのではないだろうか。それに、今日の相談の趣旨も、加藤自身が会社のやり方に不満を持っているわけではないのだが、間島が密告者であった場合、進んで協力したいという内容であった。

「まさか、こいつ……」自分に対して特別な感情を持っているのではないかと感じた間島は、視線を加藤に戻した。

第2章 分裂

1.

間島と加藤が二人だけで会っていたときと同時刻、新宿の繁華街の奥にある裏路地に面したバーカウンターの片隅に、一人静かにグラスを傾げる小島浩二の姿があった。ここは、彼が考え事をしたいときによく利用しているバーであった。ここに来るときは、いつも一人だった。

浩二は、頭を抱えていた。兄から密告者を探し出すようにという指示を与えられていたが、それに対してどのように対処したらよいのかを思い悩んでいたからだ。

やり方は任せるとは言いながらも、兄は、暗に一人一人と面談した上で探り出すことを期待しているような言葉を口にしていて、むろん、面談を行うのは簡単なことだ。社外のどこか落ち着いた場所で一人一人と相対し、話をすればよいだけである。仕事帰りに一対一で酒を飲み交わしながらでの話でもよい。

「しかし、社員たちがオレに本音をしゃべるだろうか……」心配のもと、この部分にあった。自分は社長の弟であり取締役管理部長という肩書もある。誰の目にも社長と一心同体の存在に映り、管理する側の人間だという目で接してくることは間違いない。そんな自分に対して、社員たちが本音を語るとは、とてもではないが思えない。

面談を行うからには、密告者が自分のことを信頼して真実を打ち明け、『社長には黙っていてほしい』と懇願されつつも状況を改善してほしいなどと相談を受けるような展開でなくてはならない。

そのような事態に直面したとき、自分がどのような感情にとらわれるのか、真実を打ち明けられた後にどのような行動を取るのかはそのときにならないとわからないが、少なくとも密告者の話には耳を傾けることはやるつもりでいる。やるつもりというよりも、やらなければならない、やれる自信があるというのが本心であった。

しかし、それは自分のほうから見た一方的な見方であり、社員が、そもそも自分との間に壁を築いているのであれば、自分の思い描くような展開が実現するはずもない。そのことに関しては、まったくといってよいほど自信を持てなかった。

グラスの中身を飲み干し、そっとグラスをカウンターに置いた浩二は、深いため息をついた。

なんとか良い形で今回の事態を解決し、兄の期待に応えたい。そのためには、密告者の存在を特定する必要がある。しかしながら、社員たちが自分に対して本音を語るとは思えない。堂々巡りの展開に、浩二は解決の糸口を見いだせずにいる。

「なんとしてでも告発者を特定しなければ……」焦りを覚え始めた浩二の脳裏に、一人の男の顔が浮かんできた。デザイナーの江川であった。

浩二は、告発者の位置に江川の存在を当てはめていた。江川のことを怪しいと感じた理由は、兄が弁護士をしているということと彼自身が正義感の強い人間であるということだった。

身内に弁護士がいるのであれば、告発の方法を知ること容易であろう。また、どのような証拠資料を揃えれば労働基準監督署が動くのかということを知った上で行動することも可能だった

のではないだろうか。

そしてなによりも、江川が密告者であるということは自分の勘に働くことでもあった。

浩二は、自分の勘を大事にするタイプであった。今まで難しい局面に立たされたときに、勘を信じて行動し難を逃れたことが幾度となくあった。自宅に電話がかかってきたときに、電話に出る前に勘で電話の発信者を予測し、その通りであったことも何度もある。浩二は、自分のことを勘の鋭い人間であると思っていた。

江川が密告者であるということに関しては、状況証拠もあり自分の勘にも働いている。

浩二は、江川が密告者であることを裏付ける証拠を集めた上で、彼と直接話をしてみようかと考えていた。

証拠を集めようと思えば集められないこともない。今は、パソコンの使用履歴を調べる技術が発達している。個人が所有するパソコンならともかく、仕事で使用しているパソコンは会社の所有物であるため、専門業者に頼んで江川が使っているパソコンの使用履歴を調べても問題はない。

デスクや備品なども会社からの貸与品であり、中身を調べても問題はないだろう。

あるいは、会社に取り付けてある防犯カメラの映像を解析することで、江川が証拠資料を無断でコピーしている証拠をつかむことができるかもしれない。

証拠集めのための行動を起こそうかと考えた浩二だったが、心の中で自制を求めるもう一人の自分がいた。「そんなことをして意味があるのか?」、「事が大げさすぎやしないか?」そのような思いが胸の中を駆け廻っていた。

実際にパソコンの使用履歴を調べるのであれば、一定期間パソコンを差し押さえなければならなくなる。江川のパソコンだけを差し押さえることに関して、周囲を納得させる理由を作ることができるだろうか。さらに、パソコンが使えなくなれば、その期間は江川が担当する案件の作業が滞ってしまう。江川が都合よく何日間かまとめて休みを取ってくればよいのだが、そのような保証もない。

また防犯カメラの映像を解析するにしても、防犯カメラには社内の特典部分の映像しか記録されていないため、偶然その範囲に怪しい映像が映り込んでいない限り証拠にはつながらない。そもそも、いつ密告のための証拠資料を入手したのかさえもわからないので、対象とする映像の範囲も特定できない。

証拠集めが現実的でないのであれば直接江川と対決するよりほかないのだが、それだと、社員が自分に本音を語るとは思えないという壁にぶち当たってしまう。

浩二は、何度も頭を振り、大きなため息をついた。

2.

出口の見えない状況の中でもがき苦しんでいた浩二の脳裏に、ある疑問が芽生えてきた。「そもそも犯人捜しをすべきなのだろうか?」という疑問であった。

犯人捜しなどに労力を使うのではなく、今回の密告を社員からの声であると受け止めた上で、会社としてやれる範囲で善処することに全力を注ぐべきなのではないだろうか。

自分も、今の会社に入るまでは普通のサラリーマンだった。雇用される側の人間が、会社に対して管理されているという意識を持つことや働いた分のお金はきちんと貰いたいという気持ちを持つことは理解できる。

兄は、デザイナーたちは自分のペースで作業をしているのだから残業のことなど意識するはずもないなどというようなことを言っていたが、ほんとうにそうなのだろうか。

彼らは、慢性的な長時間労働にさらされている。たしかに、細かい指示を与えられない分、時間に対する意識は一般のサラリーマンよりは低いのもかもしれないが、そのことと残業代とは別の話なのではないだろうか。

家庭のある社員もいる。子どもが成長するにつれて、必要となるお金は増えてくる。

家庭がなくても、将来の結婚を意識していれば、お金はいくらでも必要だと考えるはずだ。

そんな中、どれだけ働いても収入に反映されない構図に警鐘を鳴らしている社員がいるのではないだろうか。

デザイナーは、会社にとって重要な戦力だ。仕事を取ってくるのは兄と自分の役目であるが、営業活動を行えるのも社内に優秀なデザイナーがいるという安心感があるからだ。発注者側の要望に応えるためのデザインをデザイナーたちが企画、設計してくれる。その出来栄を評価してくれた取引先が、新たな案件を発注してくれる。

重要な戦力であるデザイナーたちにそっぽを向けられたら、たちまち会社は立ち行かなくなるだろう。

そのような危機感を抱いた浩二は、「自分の果たすべき役割とはなんなのか？」ということに関する自問自答を始めた。

取締役という肩書がある以上は、経営側の立場で行動をしなければならない。会社である以上、必要最低限の利益を確保しなければ存続できない。社員たちの言うことに対してなんでも耳を傾ければよいわけではない。

しかしながら、社員たちに気持ち良く働いてもらい、能力を存分に発揮してもらえるような環境を築く責任も背負っている。社員がいてからこそその会社だからだ。

また会社である以上、法律を守る義務も課せられている。労働基準監督署から言われるまでもなく、働いた時間分の賃金をきちんと払うことは当然の話だ。

管理部長であるならば、本来であればそのような法律を率先して守らなければならない立場にいる。反面、四角四面なやり方をしていたのでは、会社の経営が成り立たなくなる。

いくつもの相反する事象が浩二自身の周囲を取り巻いていた。

そんな中、浩二は、自分の果たすべき役割について考えを進めていった。

今会社としてしなければならないことは、社員たちの意見に耳を傾けながら会社の考えも伝え、その上で社員たちがなんの疑念も抱くことなく能力を発揮する状況を作ることだ。

法律を守ることに關しても、守ることを前提にした上で、会社にムリが生じない形で改善していく道筋をつけることが必要となる。それには、社員たちからの理解も労働基準監督署からの理解も必要だ。

そのように考えを推し進めた浩二の中で、自分の果たすべき役割というものが見えてきた。

社員たちの声に耳を傾けながら会社の考えも伝え、その上で今回の事態を収束させるための道筋をつけることこそが自分の果たすべき役割ではないのだろうか。

最終的な決定は社長である兄に委ねるにしても、そこまでの橋渡しをするのが自分の役割だ。そのような考えに至った浩二の心が軽くなった。胸全体を覆っていた重しが取れたようにも感じる。

「具体的に、どうするかだな……」役割を果たすためにどのような行動を取るべきなのかということについて考えを巡らす。

いくつものアイデアを思い浮かべては、その先の落としどころが見えないためにアイデアが萎んでいくことが頭の中で繰り返される。

そんな中、浩二の胸中に、ある不安が芽生えてきた。今回のことが原因で、社内が分裂してしまう危険性があることについてであった。社員たちの間にも疑心暗鬼が芽生えている可能性が高い。それが原因で社内がぎくしゃくしてしまわないとも限らない。

「そういう事態が発生しなければよいのだが……」浩二は、自分が具体的な行動を起こすまでの間に、社内に悪い変化が生じないことを祈った。

3.

労働基準監督署の調査が入った日から三日後の夜、健一と浩二は、二人の行きつけの店の一つである小料理屋に姿を現した。

二人は、週に一度は晩御飯をとともにしていた。たいていは、健一からの呼びかけにより食事の場が設けられていた。

食事の目的は、営業情報の共有や会社の今後についての意見交換などであった。

二人は、会社の営業を担う立場であるのと同時に経営者でもあった。会社の重要事項に関する話しあいを行う場合など、狭い社内では話しづらいことも多い。行きつけの店であれば、社員たちの目を気にすることもない。

今日も、二人は酒と食事をともにしながら、主要取引先の一つから申し入れのあった価格の見直しの件について話しあっていた。取引価格を下げられないかという申し入れであり、二人の間で、デザインの企画制作を請け負う販促品の分野を増やしてもらうことを条件に価格の引き下げに応じることを取引先に対して交渉するという考えがまとった。

考えがまとまったことに対して、健一が安堵の表情を浮かべる。売上の二割ほどを占める取引先であり、要求通りに価格を下げてしまうと、自分のところの経営に大きな影響が生じてしまう。そうかといって、真っ向から断ることもやり辛い。相手の心証を害してしまい取引がなくなるようなことがあれば元も子もないからだ。

そのような葛藤を抱えていた健一だったが、取引の量を増やしてもらうことを条件に価格を下げるという形で要求を飲めばよいのではないかという浩二の意見に、胸の中が整理できた。自分のところに対応する範囲を広げるということは、取引先に対してデザイン品質を均一化させるというメリットを生じさせるとともに、自分のところにもトータルの利益を増やすというメリットを生じさせるからだ。

不安を解消させた健一だったが、すぐに新たな不安要素が湧き上がってきた。労働基準監督署のことであった。密告者を探し出し、密告の意図を明らかにすることを管理部長である浩二に指示していた。やり方は本人に任せてあるが、上手く進んでいるのだろうか。

そのことを確認すべく、健一は浩二に問いかけた。

「それはそうと、社員との面談は進んでいるのか？」

「労働基準監督署の件ですか？」

「うん」

「.....実は、まだ面談はやっていません」

「なんでだよ？ もう、あれから四日も経っているんだよ」

「そうなんですけどね.....」

「なにか引っかけることでもあるのか？」

「あります」そう言うと、浩二は胸に抱えている思いを吐き出した。バーで酒を飲みながら、一人で考えを巡らせていたときに抱えた思いであった。犯人捜しに注力するのではなく、社員たちの声に耳を傾けながら会社の考えも伝え、その上で今回の事態を収束させる道筋をつけるための橋渡しをすることこそが自分の果たすべき役割なのではないのかという思いである。

そのために自分が取るべき行動についての具体的なアイデアは浮かんでいなかったが、一日でも早く行動したいという思いを口にした。

「どうしても、犯人捜しをしなくてはなりませんか？」浩二は、健一に視線を向けた。

「どうしてもっていうわけじゃないけど、このままわだかまりが残ったら、オレたちも社員たちも、お互いやり辛くなるだろう？ これだけの人数でやっているんだから.....。いいよ、キミになにかいいアイデアがあるんだったら犯人捜しはやらなくても。要は、みんながスッキリできればいいんだから」

「わかりました。なんとかやってみます」

「やり方は、キミに任すよ」健一が、任せるという言葉を口にした。

健一の言葉を聞いた浩二は、考えを巡らせた。社員たちに対して、どのように接していけばよいかということについての考えだった。バーの中で思い浮かべていたアイデアを再び思い浮かべてみる。どのアイデアも、社員たちと接した後の落としどころが見えないために萎んでいった。そのときと同じで、今も落としどころが見えてこない。

考えにふける浩二に向かって、健一が言葉を発した。

「社内の管理を見直す必要があるかもしれないな」

「なんのことですか？」考えから覚めた浩二が聞き返す。

「取引条件や財務的な情報の管理のことだよ。今は、みんなが閲覧できる状態で保管されているものがたくさんあるだろう？ それを見直したほうがいいんじゃないかってことだよ」

「.....」

「今回の密告の件でも、証拠資料が同封されていたっていうんだらう？ 現物は見せてもらえなかったけど、勤務時間や賃金計算の記録のような資料が付けられていたからこそ、労働基準監督署も自信満々な態度でやって来たんだと思うんだよ。そのような資料を社員が簡単に手に入れ

られるってことが問題なわけだよ。取引条件や財務的な情報も同じだ。今回のように、特定の取引先や税務署などに漏らされるようなことがあったら堪らないからな」

「たしかにそうですけど、でも重要な資料は、社長とボクしか見られないようになっていますけど」

「ほんとうに重要な資料は、もちろんちゃんと管理しているよ。でも、充分ではないのかもしれない。現に、今回のようなことが起こったわけだし」

「じゃあ、どんな資料の管理を見直すんですか？」浩二は健一の顔を覗いた。またしても自分に任されるのではないかと思ったからだ。

「それは、この場で考えようよ」予想に反して、健一が二人で考えようという言葉を出した。

そのまま、二人の間で保管管理を強化すべき情報や資料についての議論が行われた。強化すべき情報や資料の候補を口にし、それぞれについて、特定の相手に漏洩したときの影響を確認しあう。

浩二としては、今以上に管理体制を厳しくすることは積極的には行いたくなかった。今でも、重要書類や機密情報に関しては、自分と健一との間できちんと管理されている。

取引の情報や財務的な情報については、ある程度までの内容は社員との間で共有する必要があった。デザイナーたちは、デザインの企画も行っているからだ。企画を通すためには、どの程度のデザイン料が必要になるのかを試算し提示する必要がある。しかし、デザイナーたちが取引の情報や財務的な情報に触れることができなくなれば、デザインの企画やデザイン料の試算に支障をきたしてしまう。

浩二は、健一に向かって、そのことを口にした。

健一も、そのことについては理解していた。

二人による話し合いの結果、特定の情報や資料について、今後社員たちが触れる場合は、その都度健一か浩二の許可を得ることをルール化することが決められた。

二人の頭の中では、この程度の管理強化であれば、社員たちの仕事に大きな支障は出ないであろうという判断があった。

4.

健一と浩二が決めた社内情報の管理強化ルールは、翌朝の朝礼で社員たちに伝えられた。突然発表されたルールに、社員たちの間に戸惑いが広がる。

「なぜ、このようなルールができたのか？」という社員たちからの問いかけに対して、健一は「取引先からセキュリティ管理の徹底を求められており、ルールの見直しを行った」という言葉を口にした。

個人情報保護法が施行されてから、世の中全体にセキュリティ管理の強化を図る動きが広がっていた。セキュリティ管理が徹底されていることを認証する制度も存在する。小島デザイン研究所でも、認証の取得を検討していた矢先でもあった。

しかし、健一の説明に社員たちは納得していなかった。各々の頭の中で、密告があったことに

対する会社の対策であるという考えが広がる。

「ともかく、先ほど説明した資料に触れるときは、私が管理部長の許可を得るように」疑わしげな表情を浮かべる社員たちに向かって、健一が念押しをした。

新たなルールは、デザイナーたちの仕事に影響を及ぼした。影響の第一号は、朝礼終了後、間がなく発生した。そのときオフィスにいたのは、浩二と鶴見、中山、井上、間島、加藤の六人であった。

新規に受注したデザインの企画作業に取り掛かろうとしていた鶴見が、取引先数社の過去の取引内容が記録されたファイルの閲覧を浩二に求めた。鶴見が担当している案件は新規のキャラクターに関するデザインであり、デザインの特徴が同じような業界の同業他社に提供したものと被らないようにしようという配慮からであった。

目的を確認した浩二が、指定されたファイルが収められたキャビネットの鍵を開け、取り出したファイルを鶴見に手渡す。鶴見が、ファイルの中身を確認した後、ファイルを浩二に返却する。ファイルは、再び鍵のかけられたキャビネットに収められた。

しばらく経った後に、鶴見が同じファイルの閲覧を浩二に申し出た。新たに確認したいことが発生したからだ。浩二が席を立ち、キャビネットから同じファイルを取り出す。確認を終えたファイルは、浩二の手でキャビネットに戻された。

しかし、浩二と鶴見のやり取りはこれで終わりではなかった。間がなく、鶴見が三度目の閲覧を申し出てきたのだった。

「またか？」浩二が、うんざりしたような表情を向ける。

「すみません。キャラクターものなんで、慎重にやらないといけないと思って。社長も、むやみにコピーするなっておっしゃってましたし……」

鶴見の言う通り、健一は勝手にコピーをしないようにという言葉が口にしていた。

渋々といった表情を浮かべながら、浩二が席を立ち、ファイルを鶴見に渡す。

ファイルを席に持ち帰った鶴見が、強くファイルをデスクの上に置いた。ドンという乾いた音が周囲に響き渡る。

「まったく、面倒くさいな！」顔を俯けながら鶴見が呟いた。その声に、中山が顔を向ける。

「ペースが狂いますよね」なにかある度にいちいち許可を得ながら確認しなければならないため、作業のペースが乱れるという指摘であった。

「勝手に見るな、コピーもするなじゃ、作業が進まないよ！」鶴見が、憤懣やるかたないといった表情を浮かべながら語気を強める。その声に、井上、間島、加藤の三人も顔を向けた。

「ここまでやる必要があるんですかね？」中山が同調したような口調で口をはさむ。

「どこかの誰かさんが余計なことをしてくれたおかげで、こんな風になっちゃったんだよ」誰に向けてともなく鶴見が言葉を返した。

「ほんと、余計なことをしてくれましたよね」中山も言葉を重ねる。

中山の視線は井上に向けられていた。二人の様子を覗いていた井上と中山の視線がぶつかる。視線を向けられた井上の顔色が変わった。

「なんなんですか？ ボクのことを疑っているんですか？」井上が、中山に向かって言葉を投げかけた。

「誰も、そんなこと言ってないじゃん！」中山が言い返す。

「だって、ボクのことを見ていたじゃないですか！」

「そんなの、しらねえよ」中山が視線を逸らせた。

そのとき、鶴見がボソッと「お前がやったんじゃないのか……」と呟いた。小さく呟いたつもりであったが、その声は井上の耳にも届いていた。

表情をひきつらせた井上が、鶴見に顔を向ける。

「なんの証拠があって、そんなことを言うんですか！」井上が声を荒げる。

「じゃあ言うけど、いつも最後まで残っているのって井上だろう？ 証拠資料をこっそり揃えるためには、みんながいないところでコピーしなきゃならないからね。それに、あんたは、普段からみんなとしゃべれないから、疑われても仕方がないだろう？」引っ込みのつかなくなった鶴見が言い返した。

「鶴見さんだって、一番遅くまで残っていたことがあるじゃないですか！ ボクにコピーできたって言うんだったら、鶴見さんにだってチャンスはあるわけじゃないですか！」

「最後まで残っていることが多いって理由だけで井上さんのことを疑うのなんて、乱暴ですよ」傍らでやり取りを聞いていた間島も井上に加勢した。

「別に、オレは井上がやったって断定はしてないだろう？ ただ、疑われても仕方がないんじゃないのかって言っただけじゃないかよ」

「証拠もないのに疑われていることが腹が立つんですよ。なんにも疑われることをしていないのに」井上が鶴見と中山のことを睨みつけた。いつもは寡黙な井上が、声を荒げ怒りをあらわにしたことに、オフィス内に緊張が走る。

社員たちの言いあい、浩二が割って入った。

「言いあいするのは止めろよ！」

「だって、チクった奴のせいで、ボクたち仕事がやり辛くなったんですよ！」顔を紅潮させた鶴見が浩二に食って掛かった。鶴見としても、会社にたてつくつもりは毛頭なかったのだが、言いあいをしたことで気持ちに火が付いてしまったのだ。

「部長、ファイル管理の強化って、これからもずっと続けるつもりなんですか？」

「それって、なんとかなんないんですか？」

中山と間島が、続けざまに浩二に向かって言葉を投げかけてくる。

「社長とよく話しあってみるから、とにかく社員同士で喧嘩するのは止めてくれ！」浩二の呼びかけにより、いったんは、その場は収まった。

5.

しかし、翌朝、再び社内での言いあいが勃発した。

その日は、健一は取引先へ直行のため昼からの出勤であった。浩二も、朝から営業の仕事で外出し、社内にはいたのは社員だけであった。

事の発端は、江川宛にかかってきた一本の電話だった。新しく江川が担当することになった案件の発注先からの電話であり、おおよそのデザイン料を教えてほしいという内容であった。社内での決済に必要なため、早急に回答が欲しいということを電話の相手は口にした。

折り返し連絡すると答えた江川は、デザイン料を試算すべくパソコンに向かった。発注先が要望するデザインの内容を確認する。しかし、そこから先は会社のデザイン料金基準や類似案件のデザイン料を確認しなければならなかった。

江川は、オフィスの奥に視線を向けた。オフィスの奥には社長と管理部長の席があるのだが、あいにく二人とも不在である。

「どうしたらいいんだよ……」江川が狼狽えた。

「どうしたんですか？」間島が声をかける。

「案件の発注先にデザイン料を回答しなきゃならないんだけど、ファイルが見られない」会社のデザイン料金基準や過去の案件のデザイン料の記録が収められたファイルは、鍵のかかったキャビネットの中にある。

「いつまでに回答しなきゃならないんですか？」

「早急に回答してほしいって言われているんだけど……」電話の相手は、昼までには回答してほしいという言い方をしていた。

「社長と部長って、いつぐらいに戻ってくるの？」やり取りを目にした鶴見が、事務担当の加藤に確認する。

「社長は、午後から出てくるっておっしゃっていましたが。部長は、なにも聞いていません」

「とりあえず、先方に連絡を入れたほうがいいんじゃないのか？ 回答が昼過ぎになりますっていう連絡を」鶴見が、江川にアドバイスを送った。

江川が、発注先に電話を入れた。昼過ぎに回答の連絡を入れるということを伝える。電話に向かって、何度も詫びの言葉を口にした。相手が、すんなりとは理解をしてくれないようであった。

電話を終えた江川が、顔をしかめながら舌打ちをした。

「嫌なことを言われたんですか？」間島が話しかける。

「散々嫌味を言われたよ。時間がかかるんだったら、他のデザイン会社に乗り換えちゃうよとか言いやがってさあ……」江川が、電話でのやり取りをつぶさに口にした。

電話でのやり取りを口にした江川の胸中に、やり場のない怒りが湧き上がってきた。電話の相手にねちねちと責められたことにも納得がいかなかったが、それ以上に必要な情報をすんなりと見ることのできない状況に陥っていることへの不満が募った。

今までであれば、なんでもないことであった。普通にキャビネットからファイルを取り出し、会社のデザイン料金基準と類似案件のデザイン料を確認した上で、これから自分が担当する案件のデザイン料を試算し、発注先に連絡を入れる。せいぜい三十分もあれば済む内容だった。

今までであれば、とっくに連絡を終え、デザインの制作に取り掛かっているはずであった。それなのに、連絡を入れられる目途も立たず、デザインの制作にも取り掛かれない。

「なんなんだよ、これって！」江川が声を荒げた。全員の視線が江川に向けられる。

「この中の誰かが余計なことをしたからだよ」鶴見も声を上げた。

全員が、それぞれの顔を覗く。互いに腹の中を探りあうような空気が生まれた。

「オレじゃねーよ！」その場の空気に耐えられなくなった中山が口を開く。

「オレと中山が犯人じゃないことは確かだからね」労働基準監督署の調査が入ったその日の夜、会社の近くの居酒屋で中山と語りあったときのことを思い返しなが、鶴見も口にした。

「じゃあ、ボクたちの中に犯人がいるとでも言うんですか？」江川が、興奮気味に言葉を返す。

「そんなこと、一言も言ってないだろう！ただ、オレたち二人は犯人じゃないって言っただけだろうが」

「それって、ボクたちの中に犯人がいるって言っているようなもんじゃないですか！」

「そんなの、あんたが勝手にそう思っているだけだろう！」

「だれが聞いたって、そういう風に言っているように聞こえますよ」

「しらねーよ、そんなの！」

鶴見と江川の間には火花が散った。オフィス内がピリピリとした空気に包まれる。

「じゃあ、ボクも言わせてもらいますけど、チクツたのって鶴見さんたちじゃないんですか？」江川が、鶴見と中山に向かって反撃した。二人の顔色が変わる。

「ボクたちは、この仕事が好きでこの会社に入ったんだし、社長にも感謝しているし、チクろうとなんて思わないですよ。でも、鶴見さんたち転職組は、オレたちとはそこらへんの気持ちは違うだろうからさ。それに、家族がいてお金が必要だからチクツたんだと思っていますけどね」感情を抑えることができなくなった江川が言い放った。家族がいるという意味は、結婚を意識した相手のいる中山に対しても向けられた言葉だった。

「証拠があるのかよ、証拠が！」

「お前が一番怪しいんだよ。お兄さんが弁護士をしているとかで、調査だとか権限だとか詳しいことを知っていたじゃないかよ！」

鶴見と中山がやり返す。

鶴見と中山、江川との間で口論が繰り広げられた。

口論は、間島にも飛び火した。間島が労働Q & Aページを検索していた場面を、中山が一度目撃していたからであった。そのことを思い出した中山が、間島に矛先を向ける。それに対して、間島が加藤に弁明したときと同じ言葉を口にする。飲み会で話が盛り上がり、興味本位で検索したという話であった。

「飲み会？ 言い訳をするんだったら、もう少しましな嘘をつけよ！」鶴見が馬鹿にしたような視線を送った。

「言い訳なんかしていませんよ。ほんとうのことなんですから」間島が気色ばむ。

「鶴見さん、その言い方ってひどいと思います。一方的に嘘ついているって決めつけるのって」加藤も口を挟んだ。

意表を突かれた鶴見が加藤に視線を向けた。加藤から反撃を食らうとは思っていなかったか

らだ。

一人言いあいに加わずにパソコンに向かっていた井上が唸り声を上げた。あからさまにイライラとした表情を浮かべる。口にこそ出さないものの、その表情からは『いい加減にしてくれ！』というメッセージが発せられていた。

井上の表情を目にした鶴見が、しかめっ面をしたまま視線をパソコンの画面に戻した。せわしなくマウスをクリックする。

つられたように、中山と江川、間島も、パソコンに向かった。

張りつめた空気の中で、マウスをクリックしキーボードをたたく音だけが響き渡った。

6.

そのとき以来、社内が険悪な空気に包まれた。五人のデザイナーの間に三枚の壁があるかのような雰囲気ができあがってしまったのだ。鶴見と中山、井上、江川と間島という図式であった。

鶴見、中山と江川、間島が、互いに口を聞かなくなった。井上も、今まで以上に一人だけの殻にこもるようになった。

デザイナー間での険悪なムードは、加藤の仕事にも影響した。デザイナーが抱えている案件について確認を取ろうとしたときに、今までであれば、初めて経験する発注先や案件タイプであったことにより担当のデザイナーが即答できないことがあったときでも、経験したことのある他のデザイナーが助け舟を出すことでその場で答えをもらえていたのだが、今は、相手が困っていることを知りながらも互いに知らん顔をするため、答えをもらうのに時間がかかってしまうことが何度も発生した。

複数のデザイナーが絡んだ案件に関しても、自分に関係する内容以外については口を開こうとしない。

さらに、互いに仲たがいしているデザイナー間で連絡を取り合うときに、間に加藤を立ててやり取りを行うような雰囲気も生まれた。

デザイナーたちの異様な行動は、それだけでは収まらなかった。社内で、お互いが監視しあうような雰囲気も生まれていた。

会社が指定した資料に関して健一か浩二の許可を得た上で閲覧するルールは続けられていたが、閲覧している人間の行動を監視するような動きをデザイナーたちが取るようになっていた。

監視する側は仲たがいしている相手が機密性の高い資料に触れていることが気になり、監視されている側も資料に触れているときの周囲からの視線を感じていた。

自分たちの中に密告者がいるという思いが、社員全員を疑心暗鬼に陥らせていた。

デザイナーたちの険悪な雰囲気に振り回されていた加藤も疲れ果てていた。常に気を使わなければならなかったからだ。社内のコミュニケーションが悪くなったことで、仕事を進めるのに必要以上に時間がかかってしまう。そのことに対しても、加藤はストレスを感じていた。

一人で抱えきれなくなった加藤は、上司である浩二に相談することにした。思いつめたような表情で、浩二に対して相談したいことがあるという言葉をお口にす。

その表情を見た浩二は、加藤を会社の近くの喫茶店に連れ出した。社内では口にしづらいような話があると感じたからだ。

二人分のコーヒーを注文した浩二が、「相談したいことってなに？」と視線を向ける。

「その……、社内が、おかしな雰囲気になっているんです」加藤が、声を絞り出した。

「おかしな雰囲気とは、どんな雰囲気なの？」浩二が、優しく問いかける。

「実は……」加藤は、自分が感じている社内の異様な雰囲気を洗いざらい口にした。健一と浩二のいないときに密告者の存在を巡ってデザイナーたちの間で激しい言いあいが発生したこと、それ以来五人のデザイナーが三つに分裂してしまったこと、デザイナーたちの間で自分を間に立てたやり取りが行われていること、そして互いに監視しあっているような雰囲気があることを口にする。

「そのようなことが起きていたのか……」浩二も驚きの表情を浮かべた。

密告があったとき以来、社員同士で言いあいをしている場面を目にしたことはあったが、社内がそのような状況になっているとは気づかなかった。自分の席とデザイナーたちの席が離れていることや営業の仕事で外出する時間が多いことから、そのような社内の雰囲気を感じ取れずにいた。

「このままだと、みんなダメになっちゃうと思って。でも私の手には負えないから、部長に相談したほうがよいのかなと思ひまして……」浩二の驚く顔を目にした加藤が、申し訳なさそうな表情を浮かべた。まるで、自分自身が原因を作ってしまったとでも言いたげな表情であった。

「ありがとう、相談してくれて。本来であれば、ボクがもっと注意深く見ていなければならなかったんだけどね」浩二は、感謝の言葉を口にした。

加藤の話聞く限り、事態は深刻であった。デザインの作業自体は基本的には個人プレーであったが、中には複数のデザイナーで対応する案件もあった。そういうときは、チームワークがしっかりしていないと仕事にならない。そもそも社内の人間関係の悪化は、社員の仕事に対して確実に悪い影響を与える。

本来であれば、管理部長という立場上、常に社内の動向に目を光らせ、ギクシャクしている部分があるのであれば改善させるための取組みを行わなければならない役割が自分にはあった。加藤から相談を持ちかけられるまで社内の変化に気がつかなかった自分のことを、浩二は恥じた。

「部長、どうしたらいいんでしょうか？」加藤が、困り果てた目を向けた。

「社内がギクシャクし出したのは、密告の件で言いあいになってからなんだよね？」鶴見、中山と江川、間島との間で本格的な言いあいがあったことは、浩二も初耳であった。

浩二の問いかけに、加藤が頷く。

「ちなみに、加藤さんは、誰が密告者なのかを知っているのか？」

「いいえ、知りません」

「そうか……」

「会社も、犯人探しをしているのですか？」加藤が不安げな表情を浮かべた。自分が浩二に相談したことで、会社からの追及がさらに激しくなるのではないかと感じていた。

「なにがなんでも探し当てようと考えているわけではないよ。ただ、このまま変なわだかまり

が残っても困るしね。正直言って、どのように対処しようか頭を悩ましているところなんだ」加藤の気持ちを察した浩二が、犯人探しに執着しているわけではないことを口にした。

その言葉を聞いた加藤が、安堵の表情を浮かべる。

「これからのことはボクのほうでなんとかするから、キミは心配しなくてもいいよ」

「でも、現に私を通して話をしようとしてくるんですけど……」

「わかっている。早急に五人を集めて話をするから」

「お願いします」加藤が深々と頭を下げた。

7.

加藤を一足先に会社に戻した浩二は、そのまま喫茶店に残り、二杯目のコーヒーを注文した。これからのことを考えたかったからだ。

加藤に対しては『自分がなんとかする』と答えたが、具体的な計算があるわけではなかった。ただ、そのように答えておかないと話が終わらないと感じたからであった。

「どうしたものかな……」両手で頬杖をついた浩二は、視線を天井に向けた。デザイナーたちが分裂してしまっている状況をなんとかしなければならぬ。

加藤から聞かされた話では、社内は深刻な状態だった。このまま手をこまねいていると、加藤も含めたすべての社員にストレスを与え続けてしまう。離職する者も出てくるだろう。

今の五人のデザイナーは、いずれも優秀なメンバーであった。一人でも抜けてしまうと、会社にとってもダメージが大きい。人数が減った分、案件への対応力が低下し、そのことが売上の低下にも直結する。新しいデザイナーを確保したとしても、戦力になるまでには時間が必要だ。

加藤も優秀な社員だった。浩二が管理部長でありながら営業の仕事を兼任できるのも、ひとえに彼女のおかげであった。加藤が、社内の事務仕事を一手に引き受け、正確にこなしてくれているからである。その加藤がリタイアしてしまうと、浩二も今までのように営業の仕事に時間を裂けなくなってしまう。そうすると、会社の売上も低下してしまう。

「なんとかしなきゃまずいな、ほんとうに……」浩二は頭を抱えた。

いまさら社内情報の管理強化ルールを撤廃することで済む話ではなさそうだった。そのようなルールを敷いたことで、もともと社内に顕在していたデザイナー同士のすれ違いが表に出てきたのだ。

浩二の目から見ても、五人のデザイナーは、決して一枚岩ではなかった。専門学校を卒業してすぐに入社してきた三人と他社から転職してきた二人の間には、お互いにけん制しあう部分があった。生え抜き同士でも、寡黙なタイプの井上とそうでない江川、間島の間には、なにか互いに相容れないようなものが存在していた。

このような軋轢が表に出てしまった以上、第三者が間に立って仲を取り持つようなやり方では解決できない。そうではなく、全員の心が一つになれるような雰囲気作りが必要だ。もっと言えば、そのような雰囲気を作り出すための特別な仕掛けが必要であった。

浩二は、頭の中で考えを巡らせた。

特別な仕掛けとは、どのようなものであるべきなのか。いずれにしても、全員で話しができる

ような場が必要だ。たとえば、社長も含めた八人全員でパーティなどを催してみてもどうか。現状では、全員で集まる行事といえば年末の忘年会だけだ。他所の会社の取組みで、花見や夏のバーベキューなど季節ごとに全員が参加する行事を催したことで社内の結束力を強めていったというような話を聞いたこともある。小島デザイン研究所でも、そのような取組みを増やしていけば、結束力が強まっていくのではないだろうか。

しかし、その発想は浩二の頭の中に定着しなかった。たとえ全員参加型の行事を増やしたとしても、それにより全員が腹を割ってしゃべれるようになるとは思えないと感じたからだ。行事に参加している最中はお互い楽しく会話をするだろうが、それが終わってしまえば今まで通りの関係に戻るのではないだろうか。行事の最中は仕事から解放されているため全員がリラックスした状態で時間を共有できるが、仕事の時間は全員が常に緊張を抱えているからだ。

そのような上辺のコミュニケーションを刺激するのではなく、お互いに共有できる価値観的な部分で結束を図らなければならない。浩二は、そのような思いを強めた。

「どのような価値観なら共有できるのだろうか？……」浩二は、いろいろな価値観の形を頭の中に思い浮かべてみた。

会社の売上が増える、今よりも立派なビルにオフィスを移転する、社員の数を増やす、自分にとってはものすごくイメージしやすい価値観だったが、はたして社員たちにとってみたらどうなのだろうか。経営的には重要な価値観だが、働く側からしてみると、心を踊らされるようなことではないのかもしれない。ステータスを重んじる社員であれば立派な価値観かもしれないが、小島デザイン研究所には、そのようなタイプの社員はいない。

みんなの給料を増やす、ボーナスをたくさんもらえるようにする、昇格のチャンスが増える、このような価値観ならどうだろうか。会社の売を増やすことでみんなの給料を上げていける。売を増やせば社員の数を増やすことも可能であり、そうなれば今の社員たちを昇格させることもできる。

たしかに、このような話であれば社員たちは乗ってくるだろう。しかし、そのことで全員の結束力が強まるというイメージにはつながらない。社員たちの意識の中には、売を増やすのは、経営者であり営業マンでもある社長と管理部長の仕事であるという考えがあるはずだからだ。自分たちがなにか工夫をすることで売が増えるというイメージは抱かないのではないだろうか。

浩二は、頭をかきむしった。はっきりとした答えが見えてこない。目の前のコーヒーカップを手に取り、中身を一気に飲み干す。コーヒーはすっかり冷めていた。中身を飲み干した浩二は、三杯目のコーヒーを注文した。

間がなく、新しいコーヒーが運ばれてきた。コーヒーカップの表面から湧き上がる湯気が芳醇な香りを鼻腔に運んでくる。出来立てのコーヒーの香りを吸いこみ深呼吸をした浩二の頭の中に、ある疑問が浮かんできた。互いに共有できる価値観があれば社員たちの結束が強まることは間違いないことだが、そもそも他人から押し付けられた価値観を共有しあえるのかという疑問だった。自分たちで見出した価値観だからこそ共有しあえるのではないだろうか。自分自身の心の中でやっていきたいと思えることをみんなで感じあえる、そのような状態ができることにより結束が強まるのだ。

頭の中の疑問を追及していった浩二の脳裏に、あるイメージが湧き出てきた。先ほどまで思い描いていた『会社と社員たちとの間の橋渡しをするのが自分の果たすべき役割である』、『全員の心が一つになれるような雰囲気作りをするための仕掛けが必要である』、『自分たちで見出した価値観だからこそ共有しあえる』という考えが、一つの内容に結びつく。

「そうか、これならいけるかも」浩二は、とある仕掛けを思いついた。この仕掛けならば、社員たち自身で価値観を見出すことができ、会社と社員たちとの間の橋渡しをするという自分の役割も果たすことができる。

確信を抱いた浩二は、伝票をつかみ、席を立った。コーヒーカップの中には半分ほどのコーヒーが残っていたが、それには目もくれずレジへと急ぐ。会計を済ませ、会社に向かって早歩きで歩き出した。

仕掛けを一刻も早く行動に移したいという思いが、浩二の胸の中を支配していた。

1.

会社に戻った浩二は、社員たちの今晚の予定を確認して回った。一刻でも早く社内の結束強化を実現するための仕掛けを行動に移したかったからだ。

健一は午後から取引先のもとに出かけており、今日は会社には戻ってこない。社長のいないところのほうが、社員たちもしゃべりやすいはずだ。ほんとうは今すぐにでも行動に移したかったのだが、終業時刻までの間は社内がなにかと慌ただしい。

幸いにして今晚特別な予定がある者はおらず、終業時刻後に会議を行うことが決定した。

終業時刻を迎えた。浩二の号令により社員たちが会議室に集まる。オフィスには鍵がかけられ、電話は留守番電話に切り替えられた。

会議室内で社員たちが座る位置にも今の社内の雰囲気が表示されていた。鶴見と中山、江川と間島が二人ずつで固まり、互いに間隔を開けて席に着く。井上も、四人とは間隔を開けて席に着いた。加藤は間島の隣の席に着く。

その様子を目にした浩二は、全員で固まるようにと口にしかけたが、その言葉を途中で飲み込んだ。社員たちのほうから自発的に結束するように仕向けたかったからであった。今は、この状態でもいい。この会議を終えるころに、自然にみんなの距離が近くなっていればよいのだ。

そう考えた浩二は、会議を進行するために、社員たちに向かって話しかけた。

「今日は、突然で申し訳ない。ただ、どうしてもみんなの力を借りないといけないことがあってね。それで集まってもらいました」浩二は、社員たちの顔を見回した。

社員たちの視線も浩二に向けられていた。五人のデザイナーの顔には、一様に怪訝そうな表情が浮かんでいる。加藤だけは、期待に胸を膨らませているかのような表情を浮かべていた。

「例の労働基準監督署の件なんだけど、サービス残業が発生しない仕組みを作った上で報告しなければならないんですよ」報告の期限は一カ月後であった。すでに十日が経過してしまっている。

浩二の発言に対して、社員たちからは言葉が返ってこない。デザイナーたちの顔には、『それをやるのは自分たちの仕事ではない』とでもいいかげんな無関心な表情が表れていた。

浩二は言葉を続けた。

「ただボクはね、それよりも前に考えるべきことがあるんじゃないかと思っているんですよ。加藤さんは別にして、鶴見くんも中山くんも井上くんも江川くんも間島くんも、みんな毎日のように帰りが遅くなっているでしょう？ ボクは、そのことに対して大変申し訳ないという気持ちで一杯なんですよ」浩二は、デザイナーたちの顔をゆっくりと見回した。一人一人と視線を合わせる。デザイナーたちも、視線を返してきた。

「もちろん残業した分のお金は払うべきだとは考えているんだけど、それ以前の話として、みんなが普段からもっと早く帰れるようになるためにはどうすればよいのかを考えていきたいんですよ。鶴見くんのところには小さなお子さんがいるでしょう？ 中山くんだって結婚するかもし

れないって言っていたしね。井上くんや江川くんや間島くんだって、まだ若いんだから、もっと遊ぶ時間がほしいだろうし。どう見たって、今の状態は良くないと思いますよ」

「部長はそのようにおっしゃいますけど、でもそれだけ仕事があるんだからどうしようもないですよ」浩二の発言に対して鶴見が言葉を返してきた。他のデザイナーの顔にも、鶴見の言葉に同調しているかのような表情が浮かんでいる。

「たしかに、仕事が少ないとは言わないよ。しかし、やり方次第では、残業を今よりもぐっと減らすことができるんじゃないのかな？」

「やり方次第って、具体的に、なにをどうやるんですか？」江川が口をはさんだ。

「それを、みんなで考えてみたいんだよ」浩二が、全員に向かって呼びかける。

浩二の頭の中には、はっきりとした思惑があった。その通りに事を進めれば、確実に全員の残業を減らせることができるはずだということの答えだった。しかし、今その答えをこの場で口にするつもりはない。口にしてしまえば、ただの押し付けになってしまう。あくまでも社員たちの言葉で言わせたかった。

『みんなで考えたい』という呼びかけに、社員たちが押し黙る。浩二が呼びかけたことに対して関心は示しているのだが、誰もが口にはできるほどの意見を思い浮かばなかったからだ。

デザイナーたちの意識を浩二の思惑に沿って変えさせることが今日の会議の目的だった。それも、デザイナーたちが自発的に議論する中で意識を変えさせたい。

浩二は、デザイナーたちの意識を自分の思惑の方向に向けさせるための問いかけを行った。

「みんなさあ、もし会社が、明日から残業することは一切禁じますって言ったらどうするの？」

浩二の問いかけに、その場がざわついた。江川や間島の口から、「そんなのムリだよ……」というような言葉が漏れ出る。

その様子を目にした鶴見が口を開いた。

「残業を減らすためには、定時までの時間に仕事を済ませようと意識するところから入らなければならないと思うな。残業代を節約しようとしている他所の会社の話を聞くこともあるけど、たいがいその部分から入っているみたいだしね。ボクたちの仕事も、みんながそういうことを意識すれば、ムダな空き時間がなくなることで、生産性が良くなると思うな」鶴見の発言に中山が頷いた。

それに対して、「普通の会社ならそういうことが言えるかもしれないけど、ボクたちの場合は当てはまらないのではないですか？」と、江川が反論の言葉を口にする。

江川の主張は、デザイナーの仕事は本人のペースで作業を進めていくことが重要だという内容であった。閃きと集中力が必要な仕事であるため、気持ちに乗っているときに集中して作業を進め、気持ちの乗らないときは無理して進めない。そうすることが、結果として、お客様に対して品質の高いデザインを提供できるという考えであった。

江川の発言に、間島が「ボクも、そう思います」と同調する。周囲のやり取りを黙って聞いていた井上も頷いた。デザインの専門学校を卒業し、卒業後も小島デザイン研究所のデザイン仕事しか経験したことのない三人にとって、仕事という意識よりも芸術性を第一に考える意識のほう

が強いことが窺えた。

「ボクもデザイナーだから江川くんの言うことも理解できるんだけど、でも、作業の効率を良くして生産性を高めたほうが、お客さんにとっても自分たちにとってもプラスになるんじゃないかと思うんだけどな」中山が、三人に向かって発言する。

「プラスになるって、具体的にどんなところがですか？」

「たとえば……」中山が、プラスに働くと思うことを口にした。

中山の考えは、作業効率が良くなることで納期を短縮することができ、さらにはデザインの見直しなど依頼者に対する緻密な対応をすることができるようになるといった面で発注者にとってのメリットが生じるとともに、自分たちにとっても、今まで以上に案件をこなせることでデザイン制作の経験が豊富になり、プライベートな時間が増えることで勉強のための時間も作れるというものであった。

2.

鶴見と中山、江川と間島との間で活発な議論が交わされた。最初のうちは互いをけん制しあうような発言が多く見られたものの、時間が経つにつれて、同じ会社で働く社員同士としてどのような働き方をするのがよいのかを議論する内容の発言へと変わっていった。議論を行うときの視点が、会社や取引先、今後の自分にとって望ましいことを考えるという方向へ統一されていく。

浩二も、微笑を浮かべながらデザイナーたちの議論を見守った。自分が思い描いていた通りに、デザイナーたちの意識が変化していった。

「鶴見さんたちの言う通りかもしれませんね……」間島が言葉を発した。四人の議論による大勢が、作業の効率を良くして生産性を高めていくことが必要だという見解に向かっていった。

そんな中、江川が「担当する案件ごとにボリュームや難易度のバラツキがあるのがネックですよ。みんなが定時で作業を終わらせる意識を持ちながら仕事を進めたとしても、ボリュームの多い案件や難易度の高い案件を抱えていた場合は、定時で終わらせたくても終われない可能性が高いと思うし……。みんなの残業時間を減らして会社としての生産性を高めていこうという考えは賛成だけど、でも、現実問題、難しいと思いますね」と不安要素を口にした。

実際のところ、案件に取り掛かってみないと完了させるまでにどの程度の時間が必要なのがわからないことに加えて、納期が短い、ボリュームの多い、あるいは難易度の高い案件を担当する場合は、必然的に残業時間が増えてしまうのではないかという指摘であった。そのようなケースが生じることにより、残業時間のバラツキも生じてしまう。

江川の指摘を耳にした鶴見や中山が「たしかにそうだな……」と言葉を漏らした。それに対する対抗意見も口にできない。四人の間での盛り上がりは急速にしぼんでいった。

つかの間の沈黙が会議室内を支配する。

そんな中、今まで一度も発言しなかった井上が口を開いた。

「案件を、個人の担当という考え方でこなしていくのではなくて、みんなが担当という考え方でこなしていけばいいんじゃないんですか？」

「どういう意味？」突然の発言に、何人かが同時に聞き返す。

「一人のデザイナーが、最初から最後までを必ずやらなければならないってわけでもないでしょ。五人で、稼働しているすべての案件を納期までに仕上げればいいわけでしょ？」

「……」

「五人で分担して、その日中に必ず進めなければならない作業を進めるって感じにしていけば、残業時間のバラツキも生まれないと思うんだけど」井上の指摘に、他の四人が虚を突かれたような表情を浮かべた。案件を個人で完結するやり方に慣れていた四人にとって、デザイナー同士で協力しあうという発想は盲点となっていた。

「私も、井上さんの意見に賛成です。全員で分担しあえば、みんなもいろんな案件を経験できて勉強になると思うし、みんなの技量が合わさることでデザインの品質も今まで以上に良くなると思うし、絶対にいいと思います」加藤が、井上の意見に賛同する言葉を口にする。

「ボクも、井上くんの意見に賛成だな」浩二も加勢した。

浩二の思惑とは、全員が常に定時で作業を切り上げようという意識を持ちながら、相互に協力しあい仕事を進めていく雰囲気をも根付かせたいというものであった。そうなることで、生産性が向上するとともに社内の結束も強くなる。そうなったときの残業代対応の形も、頭の中で明確に描いていた。

鶴見、中山、江川、間島の四人も、井上の意見に対する反対意見は口にしなかった。デザイナーたちが相互に協力しあうということへの具体的なイメージは浮かんでいないものの、協力しあうことによるメリットは理解していた。

「みんなで協力しあうとして、具体的に、どのように進めていけばいいのかな？」浩二は、井上に意見を求めた。

「案件ごとに、このパーツは彼で、このパーツは彼っていうように分けていけばいいんじゃないですか？」

「パーツの振り分けは誰がやるのかな？」

「それは……、その都度みんなで決めるとか」

「でも、それをやるとグチャグチャにならないですかね？ 担当している案件が同時並行でたくさん流れていると必ず混乱すると思うし、優先順位とかで揉めそうな気もするし」

「振り分けをする人も大変だろうな。全員、均等に分けなければならないんでしょ？ モノじゃないんだし、それって難しいだろうね」江川と中山が問題点を指摘した。その言葉に、井上が口を閉ざす。

「いろいろと問題点はありそうだけれども、井上くんのみんなで協力しあうっていう発想は正解だと思うんだよ。生産性を高めることにしても残業を少なくすることにしても、みんなが協力しあわなければ実現しないと思うしね。だから、あとはやり方を考えればいいんじゃないのかな？」浩二が、全員に向かって問いかけた。

もう社員たちの意識は、会社の生産性を高め、その結果全員の残業を少なくすることを考えようという方向に向いている。互いに協力しあいながら日々の作業を進めるということについても、反対する者はいない。あとは、それをやるための方法論であった。みんなが納得し、みんなで取り組める方法を、この場で見出したい。それも、社員たちが自ら見出して、自ら実行していこ

うという雰囲気にした。浩二は、方法について議論することに関して、誰かが口火を切ることを期待した。

しばしの時間、社員たちが考えを巡らす。どの顔にも、前向きに物事を考えようとする表情が浮かんでいた。

やがて、鶴見が口を開いた。

「いいことを思いついたんだけど、案件ごとにメイン担当とサブ担当を決めるっていうやり方はどうかな？ メイン担当が、その日に進める作業の範囲やパーツの割り振りを決めて、サブ担当はそれに従いサポートするっていうやり方。こういうやり方を取り入れればみんなで協力しあおうという雰囲気も生まれると思うし、他の人のサポートもあるから時間を意識して作業を進めようっていう感じにもなるはずだし、いいと思うんだけどな」

鶴見の提案を聞いた他の社員たちが、「案件ごとのサブ担当は一人なのか？」、「メインやサブを、どのようなルールで決めるのか？」という質問を投げかける。

それに対して、鶴見が、案件ごとにメイン担当一人サブ担当一人の体制で対応し、メインやサブを決めるのは全員の話しあいで決めるのがよいという考えを口にした。今現在稼働している案件についてはサブ担当を決め、今後入ってくる案件についてはメイン担当とサブ担当をその都度決めるという考え方であった。

「特大案件や特急案件の場合はどうするんですか？ そういうのも含めて、メイン一人サブ一人でこなしていくんですか？」江川が質問を重ねる。特大案件とは特別に量の多い案件のことであり、特急案件とは特別に納期の早い案件のことであった。たまにそのような案件が生じることがあり、そのような案件に対しては、社長の指示で複数のデザイナーが係ることもあった。江川の質問の趣旨は、そのような案件が生じた場合もメイン一人サブ一人にこだわるのかということと、どのようにしてメインとサブを決めるのかということであった。

それに対して、鶴見が、そのような案件のメインとサブの配置についても、全員の話しあいの中で臨機応変に決めていけばよいという見解を口にする。メイン一人サブ一人にこだわるという意味合いではなく、今までは社長の指示で決められていたものを全員の話しあい決めていこうという考えであった。

鶴見の返事を聞いた江川が納得した表情を浮かべる。

その後も、社員たちによる白熱した議論が繰り返された。鶴見の提案が正式に受け入れられ、今現在稼働している案件や新しい案件が発生したときの担当の割り振りや作業の進め方に関するシミュレーションを口にしよう。

会議が始まるころは互いに距離を開けて席に着いていた社員たちであったが、今や全員が固まるように額を突き合わせ、議論を行っていた。張りつめたような空気も消え去り、若者たちの熱気から放たれる明るく活発な空気が会議室内を支配する。

社員たちが議論する姿を見ながら、浩二は満足げに頷いた。頭の中で思い描いていたような雰囲気ができつつあったからだ。みんなが生産性を高める意識を持ちながら、互いに協力しあうという雰囲気である。

浩二は、壁の時計に目をやった。時計の針は、午後九時を指していた。かれこれ三時間も熱く

議論していたことになる。

「みんな、今日は突然の会議だったのに、参加してくれてありがとう。みんなと腹を割って今後のことを話しあうことができ、ほんとうに良かったと思っています。案件ごとにメインとサブを決めるやり方は、さっそく明日から取り入れましょう。社長には、ボクのほうから伝えておきます。それと、残業代の件もきちんとしようと思っています。詳しいことは、後日みんなと相談した上で決めたいと思っているので、よろしく！」

浩二は、実りのある会議の終了を告げた。

3.

会議の結論は、さっそく実行に移された。次の日の朝、顔を揃えたデザイナーたちが、今現在各自が抱えている案件の内容を説明しあった上で案件ごとのサブ担当者を決定した。一日の作業計画についても、メイン担当者とサブ担当者との間で話しあいが行われた。

翌日には新規の案件が発生したが、浩二とデザイナーたちとの話しあいにより、メイン担当者とサブ担当者が決定された。

浩二は、新たな取り組みを健一に報告することにした。

社員たちと話しあいをした日から二日後に、その機会は巡ってきた。営業情報の共有や会社の今後のことについての意見交換を行うことを目的とした健一との夕食会の場であった。

浩二は、デザイナーたちが自主的に案件ごとのサブ担当者を設け、互いに協力しあいながら作業を進める体制を敷いたことを口にした。加藤からデザイナーたちが分裂しているという報告を受け、その日のうちに全員を集めて話しあったことも説明する。

「そんなやり方をしたら、かえって効率が悪くなるんじゃないのか？」健一が、怪訝な表情を浮かべた。

「大丈夫です。デザイナーたちも、このやり方のほうが効率が良くなることを認めています」

「理由は？」

「デザイナーたちが、時間を意識するようになるからですよ……」浩二は、効率が良くなる理由を説明した。デザイナーたちが、今まで気持ちの乗ったときに集中的に作業を進めることがデザイン品質の向上につながるという思いで日々の仕事をしてきたために、ムダな空き時間の発生など効率の低下を招いていたことを口にする。作業の効率を良くすることで、取引先にもデザイナーにもメリットが生まれることも口にした。

「なるほどね。わからんでもないけどな……。ところで、その取り組みは、もう実行されているの？」

「はい」

「オレのところに、事前の相談はなかったけどな」

「すみませんでした。ただ、社内の結束を強めることについてのやり方は任せるって社長はおっしゃっていましたから」

「たしかに、任せてはいたけどな」

「それに、社員たちが盛り上がっていたので。そんなときに、『社長の承認を得てから始めましょう』なんて言ったら、一気にみんなのテンションが下がっちゃいますしね」浩二は、事前相談を行わなかったことを詫びつつも、自分の判断で実行に移したことの正当性を主張した。

「それでいいよ」健一が頷く。

「ちなみに、密告者が誰なのかはわかったのか？」健一が話題を変えた。

「いいえ、わかっていませんが、その問題は封印しちゃってもいいんじゃないかと思えますけどね」

「封印しちゃっても大丈夫なのか？」

「どういうことですか？」

「社員たちの間に、わだかまりが残らないのかということだよ」

「ですから、先ほども言いましたように、社員たちで充分話しあって気持ちを一つにしたんですから。会議のときにも、『密告者は誰だ？』なんて話題は全然出ませんでしたし」

「タブーみたいになっていて、それで誰も触れなかつただけじゃないのか？」

「違います。社員たちは、密告者が誰かなんて、そんなことはどうでもいいと思っているんです。そんなことよりも、これからどうしていけばいいのかってことに意識が向かっています」浩二は、力強く口にした。

社員たちのやり取りを見ながら、浩二は、社内が団結したことを確信していた。今回の密告事件が、良い意味での引き金になったとも感じている。いまさら密告者のことを蒸し返すと、せっかくまとまり始めた社内の絆が壊れるだけである。

「キミも、それでいいんだな？」浩二の気持ちを察した健一が、浩二自身が納得しているのかどうかを確認した。

「ボクも、それでいいと思います」

「そうか……。わかった」健一が頷いた。

健一が、徳利の残り酒を浩二のお猪口に注いだ。徳利が空になり、酒のお代わりを注文する。注がれた酒を飲み干した浩二は、健一に視線を向けた。他にも相談したいことがあったからだ。

「社内情報の管理強化ルールのことなんですけどね。あれも、止めにしませんか？」

「止めたほうがいいのか？」

「ええ。先ほども言いましたように、今は社内が団結しています。社員たちがなにか懸念に思うことがあったとしても、必ずボクたちに相談してくれると思います。現実問題、ボクたちが決めたルールのせいで社員たちが仕事をやり辛くなっているのも事実ですし……。社員たちを信用して、元に戻したほうがいいんじゃないですか？」

「別に信用していなかったわけじゃないけど、あんなことが起こったわけだからな。経営者として、リスクの排除に努めるのは当然の話だろう？」

「そうですけどね」

「わかった。あのルールは、もうやめにしよう。明日の朝礼で、私からみんなに伝えるよ」

「ありがとうございます」浩二は頭を下げた。

こうすることで、ますます社員たちの仕事がやりやすくなり、効率の向上につながるだろう。浩二の胸の中が一段とスッキリした。

「仕事の話はこのへんにして、あとは軟らかい話でもするか！」新しい徳利を手にした健一が威勢の良い声を上げた。表情が、社長の顔から兄の顔へと変わっていた。

「あっ、もう一つだけ」浩二は、再び仕事の話に引き戻した。

「なに？」出ばなをくじかれた健一が怪訝な表情を浮かべる。

「残業代の件なんですけどね。デザイナーたちとの間で協定を結ぼうと思っているんですよ」

「協定？」

「労働基準監督署の人が言っていたじゃないですか。協定を結べば、実際の勤務時間に関係なく、一日の労働時間を一定時間に見なすことができるって。あれからボクなりに調べてみたんですけど、世の中にそのような仕組みがありました。裁量労働時間制っていうんですけどね」

「さいりょうろうどう？ なんだかよくわかんないけど、要は残業代を払わなくてもよくなるってことなわけ？」

「必ずしもそういうわけではないです。協定で一日八時間を超える時間を設定した場合は、基本給とは別に残業手当を支給する必要があります」浩二は裁量労働時間制の説明を始めた。会社が実労働時間とは関係なく社員と協定した時間分の賃金を支払えばよいのだということを強調する。

「それで、うちは一日の労働時間を何時間に設定すればいいの？」

「それは、社員との間の話しあいになります。実態と合う時間じゃなきゃいけないですし。今やっているメインとサブの取組みで正味必要な時間が見えてきますから、それをベースに社員と話しあいたいと思っています。その前に、裁量労働時間制を取り入れることに対して、社長の承認を得たいんですけど」

「うん。まあ、キミがそこまで言うんだったらいいと思うよ。ただ、協定を結ぶときは、私にも事前に相談してくれよな」

「もちろんですよ。社長の名前で協定を結ぶんですから」浩二は、笑いながら健一のお猪口に酒を注いだ。

4.

社内情報の管理強化ルールの廃止は、会社にとって追い風となった。デザイナーたちが、取引先に対して積極的に提案するようになったからだ。メイン担当者とサブ担当者が作業の進め方について相談しあう中で浮かび上がった取引先の要望に見合うデザインの形を、デザイナーたちが積極的に提案する。過去の取引記録から取引先のデザインに対する考え方を読み取り、今まで小島デザイン研究所が手掛けてきたデザインの実績を駆使して、最良と思われる形を提案した。

デザイナーからの提案により、取引先もデザイン選択の幅が広がった。デザイナーからの提案は、取引先からの好評を得た。

その後も、デザイナーたちの協力体制は順調に行われた。誰もが体験したことのない取り組み

であったが、混乱は発生しなかった。わからないことは、その都度デザイナーたちが相談しあって決めていたからである。

社内に活気がみなぎる。今までのように、一人のデザイナーが壁にぶち当たり、何時間も悩み続けることで作業が止まってしまうような姿は見られなくなった。互いに相談しあう雰囲気ができあがったからだ。

寡黙であった井上も、自分のほうから社内の輪に溶け込むようになった。シャイな性格の井上は対人コミュニケーションが苦手であり、自分のほうから話しかけることができずにいたのだが、和気あいあいとした雰囲気の中で自然と話せるようになったようであった。このことは、井上に対する取引先からの評価を良くすることにもつながった。

デザイナーたちの協力体制が敷かれたことによる残業面での効果も表れた。

今までは深夜の時間帯に及ぶ残業が頻繁にあったのが、全員が午後八時までには帰れるようになった。デザイナーたちが時間を意識するようになったことに加えて、互いに相談、協力しあえる雰囲気が定着したからだった。今まで一人で悩んでいたことが、周囲からの意見や協力により、その場で解決することができる。それにより、作業を進めるテンポも速くなり、時間短縮につながったのだ。

残業時間が減ったことによる効果は、デザイナーたちの表情にも表れた。食事の時間が規則的になり、十分な睡眠時間も確保できる。家族や友人と触れあう時間や趣味に費やす時間も増え、ストレスからも解放される。デザイナーたちの体に活力がみなぎり、それが前向きな姿勢にもつながった。

デザイナーたちの様子を注意深く見守っていた浩二だったが、思いのほか良い効果が表れている状況に胸を撫で下ろした。

デザイナーたちの残業時間が安定してきたことを確認した浩二は、デザイナーたちと協定を結ぶ準備に取り掛かった。

一日の労働時間を協定で取り決めなければならなかった。取り決めた時間が八時間を超えた部分を、今後残業代として支給しなければならない。しかし、協定を結ぶことで、日々一人一人が仕事を終えた時刻を把握する必要はなくなる。それをしなくても、労働基準監督署から突っ込まれることもないのだ。

デザイナーを集めた浩二は、協力体制を敷くようになってからの全員の退社時刻を公表した。出勤簿に記入された退社時刻を一覧にした資料であった。

資料を見せながら、浩二は協定を結びたいということを口にした。協定を結んだあとは、毎月固定的な残業手当を支給することになるのだということも説明する。

デザイナーたちも、協定を結ぶことの意味は理解した。

浩二とデザイナーとの間で、協定化する一日の労働時間についての協議が行われた。一日の労働時間は、通常一日の労働時間がこの程度で収まるという感覚で取り決めることが求められていた。現在の実績では、毎日の残業時間は一時間から二時間の範囲に集中していた。

協議を重ねた結果、一日の労働時間を九時間とすることで見解がまとまった。今の協力体制が定着していけば、平均的にその程度の時間に収まるだろうという統一見解がデザイナーの間に生まれていた。

浩二は、社長の承認を得た上で正式に協定化し、労働基準監督署に届け出ることをデザイナーたちに説明した。

デザイナーとの協議を終えた浩二は、そのことを健一に報告した。今現在のデザイナーの残業実績を提示し、一日の労働時間を九時間と考えた根拠も説明する。

「九時間ということは、一日一時間分の残業代を基本給に上乘せするという事か？」健一の言葉に浩二は頷いた。一日の労働時間を九時間とすることは、一日一時間分の固定残業手当が発生するという事であった。

「でも、その仕組みを取り入れることで、毎回残業代を計算しなくてもよくなりますから」浩二は、残業代の面倒な計算が不要になるメリットを口にした。

いずれにしても、これからは正規のやり方で残業代を支給しなければならない。どうせ支給するのであれば、極力面倒でないやり方で支給したい。その考え方は、健一も浩二も同じであった。

「加藤くんの残業代は、どのように取り扱えばいいの？」健一が、事務職の加藤の残業代の取り扱いについて訊いてくる。

その質問に対して、浩二は、加藤の場合は実際に残業した時間分の残業代を支給する必要があることを説明した。協定を結ぶやり方は、法律で決められた職種にしか適用できなかったからだ。

デザイナーの一日の労働時間を九時間とする協定を結ぶことが正式に決定された。

5.

ある日の夜、貸し切った居酒屋の個室に顔を揃える浩二と社員たちの姿があった。浩二の呼びかけにより、小島デザイン研究所のスタッフ全員での食事会をやることになったのだ。

健一も同席する予定でいたのだが、急遽取引先との打ち合わせが入ったため欠席することになった。

急用ができたという理由であったが、浩二は、健一が気を利かせて席を外したのだろうと思っていた。

会社と社員たちとの間に立ち、会社としての方針や社員たちの思いを上手に融合させながら、働きやすい職場づくりを推進していくことへの橋渡し役になりたいという浩二の思いを、健一は充分理解している。今回の食事会も、忘年会以外では初めてみんなで集まる社内行事だったが、あえて社長である健一が同席しないことで浩二と社員たちとで心置きなく会話をする事ができるのではないかという配慮をしたのではないかと浩二は感じていた。

個室のテーブルに料理が運ばれてきた。七人分のビールも運ばれてくる。

浩二が乾杯の音頭を取り、宴が始まった。テーブルの上の料理が、次々と若い胃袋の中へ消え

ていく。

「どうぞ」気を利かせた加藤が、料理を取り分けた皿を浩二のもとに運んできた。

「ありがとう」礼を口にした浩二が料理を口に運ぶ。

「みんな、すごいな」浩二は、デザイナーたちの食べっぷりに感心した。

「男の人って、みんな食べますもんね」猛烈な勢いで消えていく料理を目の当たりにした加藤も目を丸くする。

忘年会のときも若い男たちの食欲は猛威を振るっていたが、今日の前で繰り広げられている光景とは異質な雰囲気があった。それは、ただ食べることに集中した行為であった。そこには、賑やかさは存在しなかった。

しかし、今は賑やかさが存在した。会話と料理をセットで楽しむ時間が流れている。心を許した者同士が時間を共有する中で、各自の食欲が満たされていた。

料理とともに酒も進んだ。デザイナーたちが、次々と酒のお代わりを注文する。デザイナーたちの盛り上がり刺激を受けた浩二も、いつにもなく早いペースで酒を口にした。

デザイナーたちによる会話が、プライベートな時間の過ごし方によって変わった。早く帰れるようになったことで生じた時間をどのように使っているのかという会話が繰り広げられる。

「ボクね、検定試験を受けることにしたんですよ」井上が語り出した。人とのコミュニケーションを苦手にしてきた井上が自分のほうから会話の口火を切ることなど、以前には見られない光景であった。それだけ、井上自身が人間として成長していた。

「なんの検定？」中山が問いかける。

「Webデザイナーの検定」井上が検定名を口にした。Webサイトのデザイン能力を身に付けるための検定であった。その能力を身に付けることによって、小島デザイン研究所が受注できる案件の範囲も拡大する。

「そいつは、会社としても大歓迎だな」浩二も声を上げた。

「部長、資格手当制度を作ってくださいよ」浩二の反応を目にした江川が、意見を口にする。

「ボクたちがいろんな資格を持っていたほうが、お客さんに対して話がしやすくなるんじゃないですか？」鶴見が、浩二の顔を覗く。

「そりゃ、鶴見くんの言う通りだよ」浩二は頷いた。

「資格手当を作りましょうよ」デザイナーたちが浩二をせっつく。

浩二は、前向きに考えることを約束した。

その後も、デザイナーたちによるプライベートな時間の過ごし方の会話が続いた。

鶴見は、妻や子どもとの時間を充実させたことを口にした。子どもが起きている時間に帰れるようになり、子どもに対して積極的に話しかけたり家の中で一緒に遊んだりなどコミュニケーションを図っているということであった。妻との会話も増え、今後の人生設計について口にしよう時間も増えたということであり、周りから二人目の子どもを作る良いタイミングだと冷やかされた鶴見の顔が赤くなった。

中山も、家庭を意識した発言を口にした。彼女と過ごす時間が増え、二人の間で結婚についての話題が上ることが増えたということだった。二人の時間が増えたことで、相手の価値観を確認しあうプロセスが一気に進み、互いに結婚に対する自信を深めたことによる結果であった。仕事で良い結果を出し、もっと給料がもらえるようになりたいという中山の発言に、浩二は眼を細めた。

江川は、友人と付き合う時間を積極的に作っているということを口にした。もともと友人はたくさんいたのだが、最近では疎遠になっている友人が多かったということだった。仕事が終わる時間が遅く、平日の夜に友人たちと気軽に飲みに行く機会を作れずにいたからだ。仲間とともに過ごす時間が増えたことで、あらためて友人の大切さを知ったということだった。合コンにも積極的に参加しているという江川の言葉に、一同が爆笑した。

順番にプライベートの時間の過ごし方を口にしあったデザイナーたちの視線が間島に向けられた。間島が、慌てたような素振りを見せる。特別なにかに時間を費やしているというものがなかったからだ。早く帰れるようになったことで、なにかしら生活が変わったわけでもない。それぞれに目的意識を持つ先輩デザイナーたちの話を聞いた間島に、焦りが生じていた。

「間島くんは、どんなことに時間を使っているの？」加藤が問いかけた。

「ボクは……、みんなみたいに、なにかしているってわけじゃないから……」間島が恥ずかしそうにうつむく。

「時間ができたからって、すぐになにかをしなきゃいけないってわけじゃないからさ。じっくりと考えていけばいいんじゃないの？」鶴見が、フォローの言葉を口にした。

「そんなの、焦ったって答えは出ないわけだし」

「オレたちの中で一番若いだし、これからじゃん」

江川と中山も声をかける。

「なにか、してみたいと思うことはあるのかな？」浩二も問いかけた。

「ないことはないですけど……」

「たとえば？」

「その……、彼女を作りたいなと思って……」

「婚活したいって？」間島の言葉を耳にした江川が話を広げる。

「ち、違いますよ。別に、結婚なんか考えていませんよ」間島が、大声で否定した。

「間島くんって、付き合っている女性(ひと)いないんだ？」浩二が問いかけた。

「はい」

「今まで、一度も女性と付き合ったことないの？」

「そんなことはないですけど」

「けっこう、こう見えて、彼は奥手なんですよ」江川が口をはさんだ。

現代的なマスクで、外見からは遊んでいそうに見える間島だったが、女性に対して積極的なタイプではなかった。歳が一番近くプライベートな話をしたことも多かった江川は、そのような一面を見抜いていた。

「彼女を作りたいんだったら、自分から行動しなきゃね」

「江川くんに、合コンに連れて行ってもらったら？」

井上と中山が声をかける。

そのとき鶴見が「それよりもさあ、もっと身近に目を向けたほうがいいんじゃないの？」と声を上げた。

全員の視線が鶴見に集まる。鶴見が、視線を加藤に向ける。加藤が頬を赤らめた。

「どういうことですか？」鶴見と加藤のやり取りを目にした江川が問いかける。

「だから、こういうこと」笑みを浮かべながら、鶴見が言葉を返す。

「なるほど、そういうことね……」状況を理解した浩二や中山、井上が頷いた。

間島も、状況を理解していた。相談したいことがあると言われ、仕事帰りに会社の近くのカフェで加藤と食事をともにしたときのことを思い返す。あのとき、加藤が自分に対して特別な感情を抱いているのではないだろうかと一瞬感じたことも思い返していた。

「すみません、トイレに行ってきます」いたたまれなくなった加藤は、その場から逃げ出すように、バッグを手に個室を出ていった。

6.

宴も佳境に入った。

間島と加藤は、席を隣り合わせていた。気を利かせた先輩デザイナーたちが、二人をくつつけようと、あれこれ画策し始めたのだ。

お互いを意識した二人の会話は弾まない。その様子を目にした先輩たちが、二人の間を盛り上げようと、次から次へと話題を投げかけていた。

そんな中、酒に酔ったデザイナーたちが、密告事件の話題を口にし始めた。誰もが気に止めていたことではあったのだが、自ら口にすることがはばかれていた。口にすることで、せっかくなにか一つにまとまり始めた自分たちの絆が壊れてしまうのではないかという心配があったからだ。

「実は、密告したのはボクで一す！」江川が奇声を上げた。

「マジで！？」何人かが問い返す。

「嘘に決まってんじゃない！」江川が、笑いながら否定した。その場を盛り上げるための悪ふざけの発言であった。

その言葉に笑いが起きる。互いに詮索しあうような空気は生まれなかった。密告事件があったという事実は全員の記憶から拭うことはできないが、もはやそれは過去の出来事としての記憶に収まっていた。

過去の出来事として笑って話せることを知ったデザイナーたちの口が滑らかになる。各々が、その当時に感じていた思いを口にしながら、密告事件があったことがきっかけでみんなの心が一つになったことを実感しあっていた。

「そういえば、今だから言えることがあるんだけどさ……」鶴見が口を開いた。一同の視線が鶴見に向けられる。

「部長、気を悪くしないでくださいね」

「えっ？」いきなり話を振られた浩二は、目を丸くした。

「実はね、こいつ、最初部長のことを疑っていたんですよ」鶴見が、中山のことを指差した。

「それは、言っちゃまずいでしょう！」指を差された中山が顔をしかめる。

「なんで、部長が怪しいと思ったんですか？」他のデザイナーや加藤が、中山の顔を覗き込む

。

「オレも聞きたいな」浩二は、笑いながら話の先を促した。

「本当に、部長、怒りませんか？」

「別に怒らないよ。済んだことだし」心配そうな顔を向ける中山に、浩二が言葉を返した。

「密告文と一緒に証拠資料が添えられていたって言っていたじゃないですか？ そういう資料を一番手に入れやすい立場にいる人間は誰なのかなと考えたときに……」

「それがオレってわけか」

「すみません」

「いや、いいよ。たしかに、オレが密告者だったら、証拠資料を揃えるのは簡単なものね」

「マジに、部長じゃないですよ？」井上が視線を向けてきた。

「ほんとうにオレだったら、どうする？」浩二が、謎かけをするような表情で問い返す。

「どうするって言われても……」井上が言いよどむ。

「でも、考えてみれば、部長が密告者なわけじゃないじゃん。部長だったら、社長に直接意見できるし、それに管理責任者として責任を追及される立場でもあるわけでしょ？ 部長にとってなんのメリットもないわけだし、オレは始めから部長犯人説はないと思っていたんだけどね」鶴見が口をはさんだ。

「ちょっと待ってくださいよ。ボクが『やっぱり違うか』って言ったら、鶴見さんは『そうとも言えないかも』って言っていたじゃないですか！」

「そうなのか？」浩二は、鶴見の顔を覗き込んだ。

「ボクは、最初からそんなことあり得ないと思っていたんですけど、せっかく中山くんが意見しているんだから、頭から否定しちゃ可哀そうかなと思って……」鶴見が懸命に言い訳をする。

その姿を目にした井上や江川、間島、加藤の間に笑いが広がった。

社員たちが楽しむ様子を見ながら、浩二は、短期間の間に起こった出来事を頭の中で思い浮かべていた。密告事件は社員たちのまとまりをもたらせたが、自分にとっても得るものが大きかった。

数年前に、会社を立ち上げるという兄に乞われて今の地位についた。事務管理的な仕事の苦手な兄に代わって、社内の管理的な業務を託された。もちろん、仕事を取ってくるための営業の業務を兼務しながらである。

いきなり取締役管理部長というポジションについたのだが、社員たちとどのように接していけばよいのかを常に戸惑いながらの仕事であった。

社員たちは、自分にとっては部下である。管理部長という立場上、会社が決めたルールを徹底して守らせることはもちろんのこと、社員の成長や働きやすい職場づくりを推進していく役割も課せられていたのだが、サラリーマン時代に部下を持った経験がなく、その上自分と一回り以上

も歳の離れている社員たちに対して、どのように接していけばよいのかがわからずにいた。自分自身がデザイナーの出身でなかったことも、社員たちに遠慮してしまっていた原因であった。

しかし、今回の密告事件が発生したことで、自分の使命というものに気づかされた。それも、管理部長としての表面的な役割ではなく、社長である兄の右腕としての役割についてであった。

社員たちが自分の呼びかけに応じてくれたのも、会社と社員たちとの間に立ちながら良い会社を築きあげていきたいという思いが通じたからであろう。今回の密告事件は、会社と社員たちとの間の、そして社員同士の絆をつくるきっかけともなったのだ。

振り返ってみると、社員たちにとっても、自分にとっても、そして会社にとっても、実に良いきっかけであった。浩二は、誰かの演出のもとで、密告事件から端を発した一連の出来事が起こっていたように感じていた。

終章

労働基準監督署による指導が入った日から一カ月が経過した日の夜、社員たちが帰った後の社内で会話をする健一と浩二の姿があった。

その日、労働基準監督署への報告を済ませた浩二が、そのことを健一に報告していた。

「ご苦労さま」報告を終えた浩二に向かって、健一が声をかける。

「いろいろとありましたけど、最後は良い結果になりましたよ」浩二は、密告事件がきっかけで社内の風通しが良くなったことを口にした。

「オレもそう思うよ」健一も満足げに頷く。

「こうなったのもキミのおかげだよ。あらためて感謝する」机の上に手を突き軽く頭を下げた健一に向かって、「礼を言うなら社員たちに言ってあげてください。彼らが、自分たちで話しあって、今のような状況を作り出したんですから」と、浩二が社員の功績であることを強調した。

「もちろん、彼らにも感謝しているよ」健一も同調する。

二人の間で、社員の成長を喜びあう会話が交わされた。

二人の会話が一区切りついた。浩二が「そろそろ出ましようか？」と声をかける。

「ちょっと待ってくれ」席を立とうとした浩二を、健一が呼び止めた。

「なんですか？」

「キミに話さなければならないことがあるんだ」健一が、神妙な目を向けた。

席に座りなおした浩二は、視線を健一に向けた。

「密告の件なんだけどな」

「はい」

「実は……、あれをやったのはオレなんだ」

「はっ？ どういう意味ですか？」浩二は聞き返した。健一の言う『あれをやった』の意味が理解できなかったからだ。

「だから、密告者はオレなんだよ」

「えっ？」浩二が再び聞き返す。今度は、言っていることの意味はわかったのだが、なぜ健一自身がそのようなことをしたのかを理解することができなかった。

混乱する浩二の姿を尻目に、健一が密告したときのことを口にする。氏名を微妙に隠した出勤記録と給料明細のコピーを取り、告発文とともに労働基準監督署に送ったということであった。

。

「でも……、なんでなんですか？」頭の中を整理できずにいる浩二が声を絞り出す。

「前々から、デザイナーたちの間に結束がないことを危惧していたんだよ。それだけじゃない。彼らが毎日夜遅くまで頑張ってくれているのは嬉しかったんだが、ほんとうにこれでいいのかという思いもあったんだ。一日は、誰にも二十四時間しかない。彼らも好きでこの仕事をやっているのだろうが、仕事以外にもやるべきことはたくさんあるはずだ」

「……」

「こんな状態が続いていたら、成長できる奴も成長しないだろう？ かといって、オレから言
って聞かせても、彼らが自発的に仕事を早く切り上げて、自分たちの時間を作るようになるとは思
えなかったんだよ。そもそも、一人で案件を抱えたまま仕事を進めていたんでは、定時に仕
事を終えることなんてできっこない」

「……」

「この状態を変えようと思ったら、誰かが先頭に立って彼らのことを引っ張りながら、彼ら自
身が変わる必要に気づき、自ら変えていくための知恵を絞っていかなければならない。しかし、
オレは激情家タイプな人間だ。オレが先頭に立ったら、彼らに対して厳しく当たると思うし、彼
らも社長であるオレに対して、遠慮してなかなか腹も割らないだろうと考えた。それで、賭けに
出ることにしたんだよ。あえて混乱を引き起こし、冷静なタイプのキミに間に入れてもらうこ
とで、彼らに大事なことを気づかせようと考えたんだ」

「……」

「こんな形でキミのことを利用して済まなかったと思っている。ただ、キミでなければできな
い仕事だとも思っていた……」

健一の言葉を聞きながら、浩二は不思議な感覚に包まれていた。健一のことを恨む気持ちは毛
頭ない。むしろ、健一がこのような決断を下す前に、自分のほうから今のような役割を果たすべ
きであった。そのところはお相子であったが、健一の決断により、自分も社員たちも貴重なも
のを得ることができた。

自分も社員たちも、相互に助けあう精神を持つことで集団の中でみんなが幸せになれることを
、身をもって知ることができた。加えて社員たちは、なにも考えずに過ごしていると時間だけが
失われていくことに気づくことができた。まさに、社員の成長や働きやすい職場づくりの推進そ
のものであった。

自分は、悩み抜いた末にようやくその使命に気づいたのであったが、今回の健一による仕掛け
の中で、自然とその使命が果たされていた。

浩二は、社員たちと催した食事会の席で、密告事件から端を発した一連の出来事が、誰かの演
出のもとで起こされているのではないかと感じたときのことを思い返した。短期間の間に社員た
ちの意識が変わり自分自身の行動も変わったことについて、予め敷かれたレールの上を走りなが
ら一直線に変化していったように感じていたのだが、よもやほんとうに演出者がおり、しかも演
出の張本人が健一であるとは思ってもよらなかった。

健一のこととは、兄として、経営者として尊敬していたが、あらためて器が大きい人間であるこ
とを感じた。その思いとともに、健一に対する感謝の気持ちが湧き上がってくる。

「ほんとうに騙してすまなかったな」健一が、再び頭を下げた。

「別に怒っていませんから、誤らなくてもいいですよ」

「そうか……」健一が、ほっとしたような表情を浮かべる。

「今夜は、飲みに行きたい気分ですね」浩二は、健一を飲みに誘った。

「そうだな。どこへ行きたい？ キミの行きたいところに付きあうよ」

「そうですね。静かに話せるところがいいですね。実は新宿に、お兄さんにも言ったことのな

いバーがあるんですけど、行きませんか？ 今日、ボクが奢りますから」浩二の心の中に、一人で考え事をするとき利用している秘密のバーに健一を連れて行きたいという衝動が生まれていた。

「キミが奢るって、どういう意味？ 奢らなければならないのはオレのほうだと思っただけど……」奢られることの意味がわからない健一が、怪訝な表情で聞き返す。

「まあ、いいじゃないですか。ともかく、行くなら早く行きましょうよ。帰りが遅くなっちゃいますよ」浩二は、急かすように席を立った。健一が、慌てて帰り支度を始める。

浩二は、面と向かって口にするのは照れくさかったが、先ほど抱いた健一に対する感謝の気持ちを、いつかは口にしようと思っていた。その言葉を口にすることで、自分自身がまた一つ成長するという確信も抱いていた。

「今日、口にしちゃうかもしれないな……」バーのカウンターで正面の洋酒棚に視線を向けながら、隣でグラスを傾ける健一に向かって感謝の言葉を口にしている自分の姿を、浩二は思い描いていた。

了

告発者

<http://p.booklog.jp/book/84513>

著者 : saigayosimitu

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/saigayosimitu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84513>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84513>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ